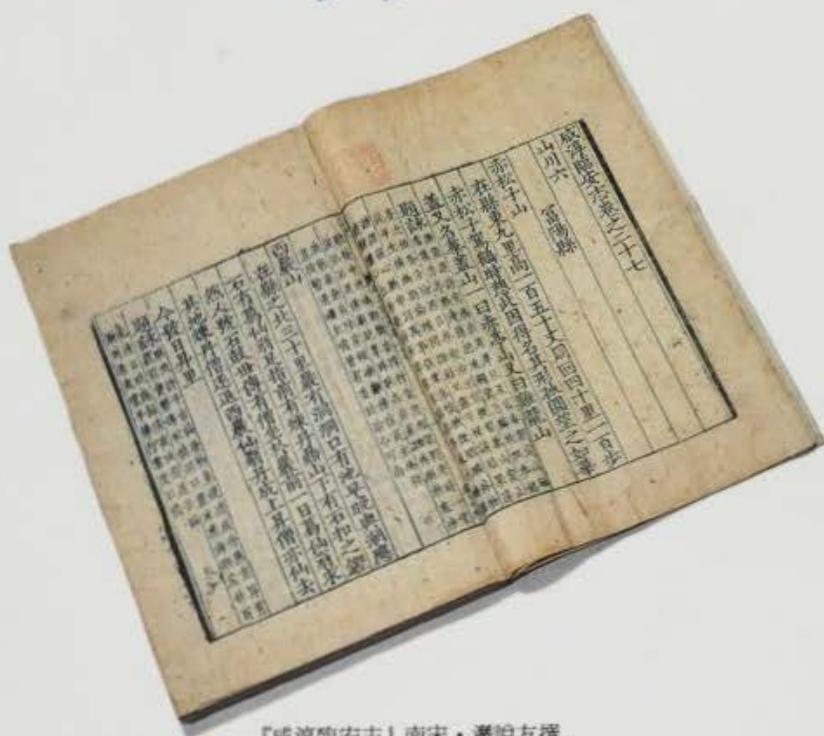




東京大学 東洋文化研究所 要覽 1996



「咸淳臨安志」南宋・潛說友撰。

東京大学東洋文化研究所



6413042802

C3

45

1996

東京大学
東洋文化研究所
要覧
1996



東京大学東洋文化研究所



男子立像 唐時代 8世紀 木造彩色 高さ 33.0 cm



武人像 唐時代 8世紀 木芯塑像彩色 高さ 30.0 cm

両像は、塑像と木像の相違はあるものの、ともに中国新疆ウイグル自治区トルファンのアスターナ古墳群より出土した墳墓副葬品である。大谷探検隊将来品と伝えられる作品である。



瓦当「千秋万歳」
瓦当は軒丸瓦のこと。千秋は千年、万歳は万年。
千年も万年もの長生きを祝う。漢皇帝に対するもの。



瓦当「漢并天下」
「漢天下を并す」は、前二〇三年に高祖劉邦が宿敵項羽を
垓下に破ったことを祝う。



シリア東北部カシュカショク遺跡第2号丘の
ウバイト期(前4,000年頃)の墓から出土した彩文土器。



殷武丁期刻辞牛肩胛骨
甲骨文は、甲(亀甲)・骨(獣骨)の刻辞の総称。
本品は水牛の肩胛骨に刻する。
殷代(～前十一世紀)後期の王武丁の時のもの。



I



II

戦国貨幣 I・II

Iの左四者は布錢，右一者は円錢。

主として布錢は中原の韓・魏・趙三国，円錢は陝西の秦国で用いられた。

IIは刀錢。主として河北の燕国や山東の斉国で用いられた。



大地神女像等壁画断片 唐時代 7-8世紀 塑壁着色 35.3×29.0 cm

本壁画断片は、スタイン請来の「シヴァ神像等壁画断片」

(ニューデリー国立博物館)と連続して、

大壁画の一部をなしていた作品と推定されており、

ホータン地域ヴァラウステ遺跡出土と考えられている。

小品ながら、我国にある西域壁画の貴重な現存遺品の一つである。



李公年 山水画 北宋時代 12世紀

絹本墨画淡彩 130.0×48.4 cm プリンストン大学美術館
本図は、北宋末の文人画家・李公年（？-1110-1114-？）
の唯一の現存作例であり、
当研究所東アジア美術研究室が三十年以上の歳月をかけ
調査・収集してきた、無慮十万点を超える
中国絵画写真史料から検索し得る膨大な作品群の中でも、
白眉をなすものの一つである。



13世紀の哲学者アブハリーの著した
ギリシア的哲学（フォルサファ）の
概論書『哲学の導き』についての
14世紀注解書の写本。



『禮記釋文』
南宋・淳熙四年撫州公使庫刊開禧咸淳間遞修本。



『大方廣佛華嚴經』
鎌倉時代中期刊本。



デリー南部のガンダク・キ・バーオリ（硫黄のにおいのある階段式貯水井戸）の内部南側。北側は階段になっていて水面まで降りられる。デリー・サルタナット初期の建造。（1959-60年、東京大学インド史跡調査団撮影）

デリー南郊クワットゥル・イスラーム・マスジッド（通称クトゥブ・モスク）の礼拝堂東正面の中央アーチ。1191-92年建造。（1959-60年、東京大学インド史跡調査団撮影）



インドネシア（東部ジャワ）の水田にて。



モンゴル遊牧民の家族。



インドネシア（中部ジャワ）の祝祭風景。



イラク北部テル・サラサート第2号丘発掘風景 1964年
左に立っているのは江上波夫団長（現名誉教授）。

目 次

I	沿 革	1
II	組 織	5
III	職 員	7
IV	財 政	11
V	施 設	13
VI	図書・資料	15
VII	外部評価	21
VIII	研究活動	23
	A 部門研究	23
	B 長期国際共同研究	27
	C 班 研 究	29
	D 定例研究会	41
	E 内外学術研究・調査	42
	F 国際学術交流	55
	G 学内教育参加	60
	H 刊行物一覧	63
	I 執筆著書・論文等総数 受賞	70
IX	所員の活動	71
X	附属東洋学文献センター	120

I 沿革

1. 設立目的

【研究部門】

本研究所は1941年11月26日、東洋文化の総合的研究を目的として、東京（帝国）大学に設置創設された。当初は哲学・文学・史学部門、法律・政治部門、経済・商業部門で、附属図書館内に研究室、書庫、事務室を置いて発足した。1949年、新たに3部門が増設されたのを機会に組織を細分化し、哲学・宗教部門、文学・言語部門、歴史部門、美術史・考古学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し、これまでの附属図書館内研究室を分室とし、研究の発展をはかった。

ついで1951年、人文地理学部門と文化人類学部門が加えられたが、アジア諸地域の基礎的研究の重要性が増大するにともない、地域区分を軸とした将来計画のもとで、従来の諸科学の専門体系による部門構成を、汎アジア経済部門、汎アジア人文地理学部門、汎アジア文化人類学部門、東アジア政治・法律部門、東アジア歴史部門、東アジア美術史・考古学部門、東アジア哲学・宗教部門、東アジア文学部門の8部門に再編成し、さらに地域部門の増設計画を立てた。そして1960年には南アジア政治・経済部門、1964年には東北アジア部門、1968年には西アジア歴史・文化部門、1973年には東南アジア経済・社会部門、1978年には西アジア政治・経済部門が増設されて、ようやく13部門を擁するにいたった。

しかしながら、アジア諸地域全体が世界史的転換期に入った今日、本研究所が、わが国のアジア研究の中核的、指導的役割を果すために研究内容の充実、規模の拡大を含む組織上の再編成を行うことが必要となった。そこで、1981年より新しい構想に基づくいわゆる大部門制を採用し、これまでの13部門を、汎アジア部門、東アジア部門、南アジア部門、西アジア部門の4部門に統合して再出発し、現在にいたっている。

【附属東洋学文献センター】

なお1966年には、東洋学に関する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として、附属東洋学文献センターが附属施設として設置された。ここでは、漢籍目録、中国現代書目録作成事業、漢籍調査、漢籍講習会開催、センター叢刊刊行などが行われている。

【建物】

創立以来23年にわたって、本研究所は附属図書館内研究室や外務省所管の建物の仮住いの状態のままであったが、1967年に、本郷校内に総合研究資料館との合同庁舎が完成し、5階以上を本研究所が使用することになった。

しかしその後、研究組織の拡充、研究活動の多様化、図書・資料の増加などにもとない、狭隘な施設の改善、とくに書庫の緊急な増設等の強い要望があり、1983年にいって総合研究資料館との交換分合により、本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これにともなって全面的に改修工事を行い、1984年3月に工事が完成し、本研究所の建物総面積は6,577平方メートルで、地下1階より地上8階までとなった。3階までを所長室、事務室、図書館、附属東洋学文献センター、会議室等とし、3階の一部と4階以上は各研究部門の研究室である。なお地下から8階まで(2階を除く)の北西部分(約1,800平方メートル)は書庫にあてられている。また、1995年には旧東方文化学院前の獅子像が大塚から東洋文化研究所に移設された(『学内広報』No.1048、1996年1月29日号参照)。

2. 将来計画

【研究所の特色】

本研究所の研究者は各々専門に従った独自の課題のもとに研究活動を進めながら、同時に、各専門分野の孤立を避け、アジア諸地域の総合的研究を推進するという所期の目的を達成するために、合同の研究会、各種研究班によって学際的研究を育て、また研究陣容の補強を図るため、学内外の専門分野の研究者に研究を委嘱し、協力を求める方針をとってきた。

東京大学が大学院重点化の中で大きく変りつつある現在、本研究所も、研究課題の設定や研究組織の面で大きな転換を必要としている。本学の文学部、教養学部、その他の部局でのアジア研究と比較した際の本研究所の研究の特色を述べるならば、それは古典研究と現代研究との統合、と表現できよう。そして、多様な

アジアの諸地域を総合的に比較する視点も今後一層強められていくであろう。

【長期計画研究】

多様なアジアを研究するためには多彩な研究プロジェクトが必要であるが、それらを比較統合するためにも、研究所としてまとまりのある研究プロジェクトが必要である。本研究所は、1988年度から3カ年計画でなされた文部省の科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」の実施に際して、教官の半ばが参加してその研究計画実施の中心機関として機能した実績をもつ。その経験を承けて1993年度から10年計画の、研究所をあげて取り組む二つの研究プロジェクトを設定した。一つは、「激動するイスラム圏の政治・社会構造の変容過程の研究」であり、他の一つは、「中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究」である。後者は、香港大学アジア研究センターと共同で、5年間にわたり、香港研究プロジェクトならびにアジア研究ネットワーク形成プロジェクトとして進められている。また1995年度から準備作業を開始した第三の長期計画研究プロジェクトとして、「環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動」を進めている。これらの研究プロジェクトは、本研究所が研究情報センターとしての役割を引き受け、本学の他部局や他大学・研究所等の研究者、そして海外、なかんずくアジア諸国の研究者の協力を得て行われる。このような長期にわたる大規模な研究のためには恒常的な予算措置が必要であるが、研究所が実施してきた特別事業を大幅に改定して、必要な予算を確保することと同時に、研究人員の確保が重要である。アジア諸国の研究者を招聘して研究計画を推進するとともに、研究のネットワークを広げるために、外国人客員部門の新設を求めている。

【海外研究拠点】

以上のような研究計画を実り豊かなものにするためには、現地定着型の研究を組織することが必要であるが、そのために本研究所は海外研究拠点を作ることを構想してきた。その最初の試みとして、1995年10月に香港大学アジア研究センターと学術交流協定を締結し、共同研究を恒常的に行うこととなった。交流協定は、(1)共同研究の実施、(2)学者・研究者の相互訪問、(3)資料および研究情報の交換、を柱としている。1997年7月1日の中国への返還にともなうさまざまな変化が、香港内部のみならず、国際的規模で生じるものと予想される。その変化を現場から学問的に追求することは本研究所にふさわしい任務であり、また世界から期待されている任務である。さらに長期にわたる研究蓄積を図る上でも、香港における研究拠点の役割は重要であろう。また、タイのカセサート大学、上

海復旦大学とも交流協定に基づいた共同研究を進めつつある。さらに、北京、シンガポール、デリー、イスタンブール、アンマンなどを次の有力な候補地として考え、研究拠点設置と研究ネットワーク形成のために研究所は全力を傾けている。

【大学院教育】

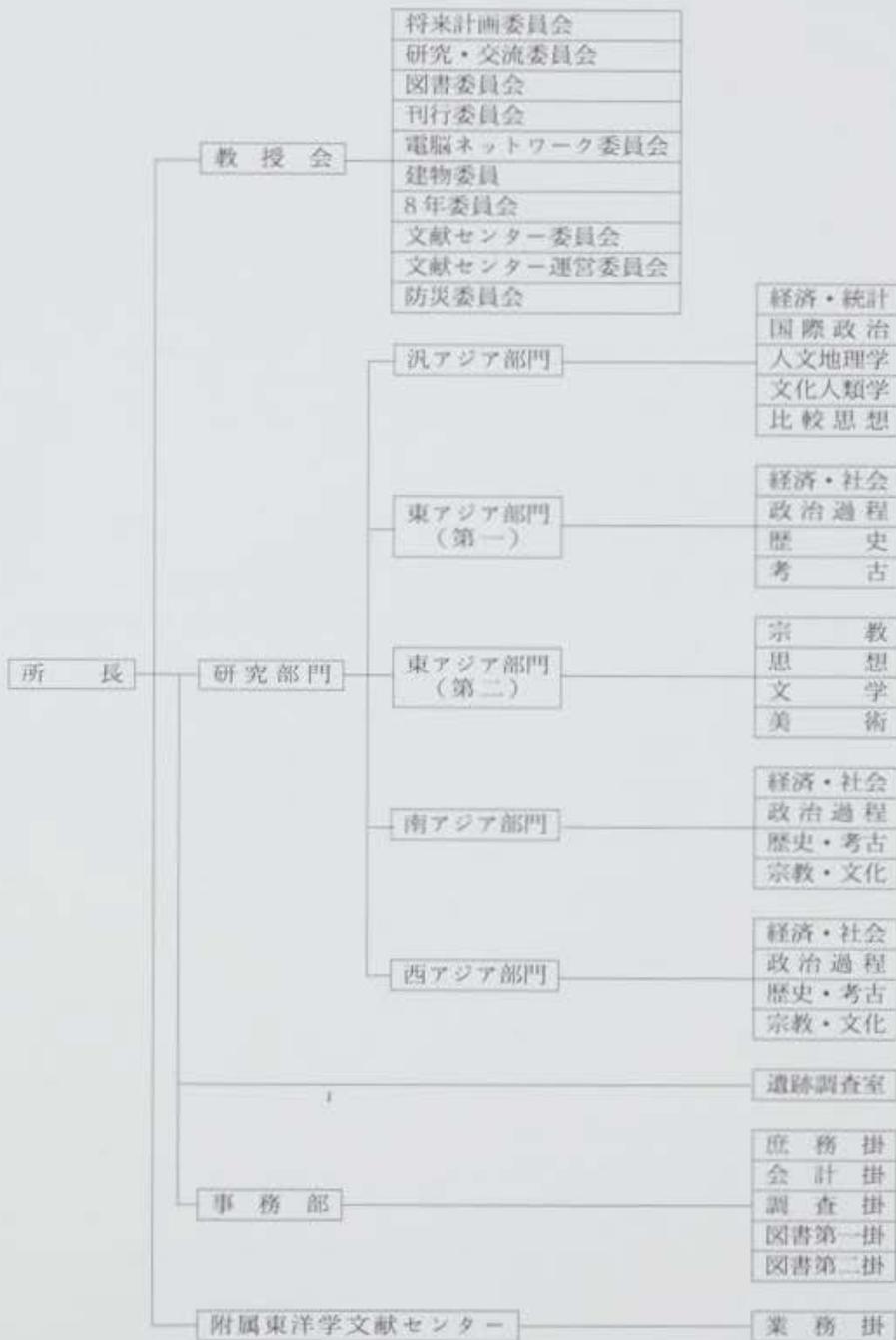
東京大学の大学院構想が実施されていく中で、大学附置の研究所は研究所講座として大学院教育にかかわることになった。しかし、研究所が、今後どのような特色ある独自の大学院教育を行っていくかという課題は、全学的に議論されなければならない大きな問題である。若手研究者の育成をアジア研究の重要な一貫として位置付けてきた本研究所は、アジア地域の比較論・関係論を中心とする新たな大学院研究科ないしは専攻の設置を構想してきた。大学全体の議論の過程で、この構想を実現すべく努力をつづけていきたい。

【外部評価】

1995年8月から1996年2月にかけて外部評価作業が行われた。そこでは、より広範な国際的研究活動を進めるためにも(1)汎アジア研究部門の役割の強化、(2)東南アジア研究部門・中央アジア研究部門の増設の必要性、(3)アジア研究に関する情報センターとしての役割の強化、(4)若手研究者養成の緊急性などが提言された。(本文「外部評価」の項参照)。また、1995年9月に「21世紀のアジア—アジア研究の新たな枠組の構築」と題した国際会議を開催した。

総じて、内外共に大きな転換期にある現在、本研究所のこれまでの研究蓄積を踏まえ、21世紀におけるアジア研究の課題を見通す議論を深め、その中で、研究・情報センターとしての研究所の体制を整えていくことが重要となっている。

II 組織



【歴代所長】

氏名	在職期間
桑田 芳藏	1941.11.26-43. 3.31
宇野 圓空	1943. 4. 1-46.10. 5
戸田 貞三	1946.10. 6-47. 9.30
辻 直四郎	1947.10. 1-54. 3.31
仁井田 隆	1954. 4. 1-58. 7.10
飯塚 浩二	1958. 7.11-60. 7. 9
結城 令聞	1960. 7.10-62. 7. 9
江上 波夫	1962. 7.10-64. 7. 9
飯塚 浩二	1964. 7.10-65. 2.28
小口 偉一	1965. 3. 1-66. 3.31
川野 重任	1966. 4. 1-68. 3.31
小口 偉一	1968. 4. 1-70. 3.31
泉 靖一	1970. 4. 1-70.11.15
川野 重任 (事務取扱)	1970.11.16-70.12.17
鈴木 敬	1970.12.18-72. 3.31

氏名	在職期間
荒 松雄	1972. 4. 1-73. 3.31
窪 徳忠	1973. 4. 1-74. 3.31
佐伯 有一	1974. 4. 1-76. 3.31
大野 盛雄	1976. 4. 1-78. 3.31
深井 晋司	1978. 4. 1-80. 3.31
中根 千枝	1980. 4. 1-82. 3.31
大野 盛雄	1982. 4. 1-84. 3.31
尾上 兼英	1984. 4. 1-86. 3.31
山崎 利男	1986. 4. 1-88. 3.31
斯波 義信	1988. 4. 1-90. 3.31
池田 温	1990. 4. 1-92. 3.31
松谷 敏雄	1992. 4. 1-94. 3.31
後藤 明	1994. 4. 1-96. 3.31
濱下 武志	1996. 4. 1-現在

【名誉教授】

氏名	称号授与
江上 波夫	1967. 5
川野 重任	1972. 5
窪 徳忠	1974. 5
鈴木 敬	1981. 5
荒 松雄	1982. 5
佐伯 有一	1983. 5
大野 盛雄	1985. 5
松井 透	1987. 5
中根 千枝	1987. 5
関 寛治	1987. 5

氏名	称号授与
尾上 兼英	1988. 5
鎌田 茂雄	1988. 5
山崎 利男	1990. 5
板垣 雄三	1991. 5
池田 温	1992. 5
山田 三郎	1992. 5
田仲 一成	1993. 5
友杉 孝	1993. 5
松丸 道雄	1995. 5

【歴代事務長】

氏名	在職期間
山高 力三	1941.11.27-42. 9.30
根本 喜藏	1942.10. 1-44. 7. 9
長内太郎吉	1944. 7.10-54. 7.15
工藤松之助	1954. 7.16-63.10.31
宮本 健	1963.11. 1-69. 2.28
新井 康次	1969. 3. 1-74. 3.31
斎藤 益	1974. 4. 1-77. 6.30

氏名	在職期間
三浦 皓守	1977. 7. 1-81. 3.31
伊藤秀三郎	1981. 4. 1-83. 3.31
岡部 藤男	1983. 4. 1-86. 3.31
木内 義一	1986. 4. 1-90. 3.31
江澤 兵治	1990. 4. 1-92. 6. 1
石川 純男	1992. 6. 1-95. 3.31
千葉 勝志	1995. 4. 1-現在

III 職員

所長 濱下 武志

汎アジア部門

原 洋之介 教授 (707室)
猪口 孝 教授 (702室)
田中 明彦 助教授 (306室)
原田 至郎 助手 (413室)
松井 健 教授 (703室)
末成 道男 教授 (711室)
関本 照夫 教授 (712室)
岡本 サエ(兼) 教授 (305室)

東アジア部門 (第一)

濱下 武志 教授 (411室)
宮嶋 博史 教授 (410室)
平勢 隆郎 助教授 (408室)
吉開 将人 助手 (412室)

東アジア部門 (第二)

蜂屋 邦夫 教授 (502室)
丘山 新 教授 (508室)
鈴木 隆泰 助手 (512室)
丸尾 常喜 教授 (503室)
尾崎 文昭 教授 (511室)
笠井 直美 助手 (708室)
小川 裕充 教授 (510室)

南アジア部門

加納 啓良 教授 (607室)
高橋 昭雄 助教授 (610室)
柳澤 悠 教授 (603室)
中里 成章 教授 (608室)
井坂 理穂 助手 (612室)
上村 勝彦 教授 (602室)
永ノ尾信悟 教授 (611室)

西アジア部門

鈴木 董 教授 (803室)
長澤 榮治 助教授 (811室)
松谷 敏雄 教授 (807室)
羽田 正 助教授 (810室)
山中由里子 助手 (813室)
後藤 明 教授 (808室)
鎌田 繁 教授 (802室)
森本 一夫 助手 (812室)

遺跡調査室

前任技術専門職員 千代延恵正

事務局

事務長 千葉 勝志
総務主任 風間 正之
図書主任 秋山 紀

庶務掛

庶務掛長 柳澤 賢次
国際交流主任 結城 剛吉
庶務主任 益子 一郎
事務官 若林美由紀

会計掛

会計掛長 坂井 誠吾
給与主任 原 常子
事務官 秋廣 耕平

調査掛

調査掛主任 岡 徹

図書第一掛

図書第一掛長(併) 秋山 紀
事務官 芳賀 満子
事務官 長野 眞
事務官 新居 彌生

図書第二掛

図書第二掛長 栗林久美子
事務官 笠井 伊里
事務官 山口 淳

附属東洋学文献センター

センター長(併) 濱下 武志
センター主任 岡本 サエ
助手 鈴木 隆泰

業務掛

業務掛長 金子 俊明
事務官 畦浦美矢子
事務官 神田百合枝
事務官 波谷 義治

職員数（1996年7月1日現在）

教授 22名 助教授 5名 助手 7名
事務官 21名 技官 1名

定員

年度	教授	助教授	講師	助手	教官計	事務官	合計
1995	22	15		2	39	22	61
1996	22	15		2	39	21	60

教職員の異動等（1994年5月～1996年7月）

（教官）

1994. 9. 1 助教授 松井 健 教授（汎アジア部門）に昇任
 1994. 10. 1 中里成章 教授（南アジア部門）に昇任
 1995. 3. 31 教授 松丸道雄 停年退職
 1995. 3. 31 助手 林 秀薇 退職
 1995. 3. 31 助手 川村 康 退職
 1995. 4. 1 教授 猪口 孝 派遣（国際連合大学上級副学長）
 1995. 4. 1 長澤榮治 助教授（西アジア部門）に採用
 1995. 4. 1 吉開将人 助手（東アジア部門）に採用
 1995. 4. 1 井坂理穂 助手（南アジア部門）に採用
 1995. 5. 18 元教授 松丸道雄 名誉教授の称号授与
 1995. 9. 1 助教授 鎌田 繁 教授（西アジア部門）に昇任
 1996. 3. 31 助手 黨 武彦 退職
 1996. 4. 1 教授 濱下武志 所長に併任
 1996. 4. 1 助手 青木 敦 岡山大学文学部講師に昇任
 1996. 4. 1 尾崎文昭 教授（東アジア部門）に採用
 1996. 4. 1 高橋昭雄 助教授（南アジア部門）に採用
 1996. 4. 1 原田至郎 助手（汎アジア部門）に採用
 1996. 4. 1 森本一夫 助手（西アジア部門）に採用
 1996. 7. 1 鈴木隆泰 助手（附属東洋学文献センター）に採用

（事務官）

1995. 3. 31 総務主任 齊藤 齊 勸奨退職
 1995. 4. 1 事務長 石川純男 医学部事務長に配置換

1995. 4. 1 経理部経理課課長補佐 千葉勝志 事務長に昇任
1995. 4. 1 会計掛長 高野 胖 総務主任（会計掛長併任）に配置換
1996. 3. 31 総務主任 高野 胖 定年退職
1996. 3. 31 庶務掛長 堀内 勉 定年退職
1996. 3. 31 調査掛主任 木村源蔵 定年退職
1996. 4. 1 図書主任（図書第一掛長併任） 酒入丈夫 附属図書館情報管理課図書館専門員に配置換
1996. 4. 1 地震研究所経理掛長 風間正之 総務主任に配置換
1996. 4. 1 附属図書館情報管理課目録主任（洋書目録情報掛長併任） 秋山 紀 図書主任（図書第一掛長併任）に配置換
1996. 4. 1 物性研究所総務課共同利用掛長 柳澤賢次 庶務掛長に配置換
1996. 4. 1 工学部工学系研究科経理課給与掛長 坂井誠吾 会計掛長に配置換
1996. 4. 1 国立天文台管理部庶務課図書掛長 金子俊明 附属東洋学文献センター業務掛長に配置換
1996. 5. 1 会計掛経理主任 岡 徹 調査掛主任に配置換

IV 財、政

1. 校 費

年度	決算額（千円）	年度	決算額（千円）	年度	決算額（千円）
1990	157,971	1992	159,039	1994	165,664
1991	146,600	1993	162,961	1995	185,313

2. 科学研究費補助金

1994年度			1995年度		
研究種目	交付決定額 （千円）	件数	研究種目	交付決定額 （千円）	件数
重点領域研究	17,000	3	重点領域研究	19,900	4
総合研究（A）	7,400	4	総合研究（A）	4,400	4
一般研究（C）	600	1	試験研究（B）	4,400	1
国際学術研究 （学術調査）	27,500	4	国際学術研究 （学術調査）	23,500	3
国際学術研究 （共同研究）	6,600	1	国際学術研究 （共同研究）	4,200	1
特別研究員奨励費	4,500	7	特別研究員奨励費	5,000	6
研究成果公開促進費	4,850	1	研究成果公開促進費	10,580	2
合 計	68,450	21	合 計	71,980	21

3. その他の経費

以上のほか、「Ⅷ E 内外学術研究・調査」の項で後述するように、サントリー財団、日本生命財団、順益台湾原住民博物館林迺翁文教基金会、高梨学術奨励基金、三菱財団、鹿島美術財団、トヨタ財団、稲盛財団、鹿島財団、国際交流基金などより研究助成金を受入れた。

V 施設

1. 建物

- 1941年11月26日 東京帝国大学附属図書館内に新設
- 1948年9月 文京区大塚町56旧東方文化学院建物に移転。附属図書館内に分室をおく。敷地面積 5,081.22 m² 本館建物面積 3,012.5 m² (内 1,500 m² 程は外務省研修所が使用)
- 1965年10月 本郷構内新庁舎第1期工事完成により一部移転
- 1968年7月 全面移転完了
- 1983年3月 総合研究資料館と交換分合し、全館を使用。建物面積 6,577 m²
- 1984年3月 全面改修工事完成

現在の建物は1965年度に一部建築され、その後、増築・改修を経た。現在、老朽化と狭隘化の二つの問題点がある。雨漏りが常態化し、内外壁面の劣化とヒビ割れが著しい。抜本的には改築以外に方法はない。

建物の全スペースの3割以上を書庫としているが、すでに満杯である。附属東洋学文献センターの専用書庫も必要である。外国人研究員用の研究室の不足も深刻である。また、大学院教育の本格化も検討中であり、これらの問題に対処するためには本所のスペース増は必須の課題である。本所の建物問題はきわめて深刻であり、早急に対策を講じるべき時機になっている。

2. コンピュータ・ネットワークの進展状況

本研究所は、1996年4月に電腦ネットワーク委員会を設置し、東文研ネットワーク・システムの構築作業を正式に開始した。サーバにはIBMワークステーションを使用し、現在約70台のパーソナル・コンピュータをネットワークの端末として接続・利用している。7月から本格的にホームページの運用を開始した。

このホームページは、教官の研究情報、図書・資料情報、事務情報を一括して扱うことを目指したものである。

研究情報としては、既に『戦後日本形成データベース』シリーズが研究所ホームページ上で公開され、その他『中国に関する文化人類学的研究のための文献解題』『南アジア文献検索データベース』『広東宗族文書』“A Collection of Mantras in the Purāṇas” “A List of Vratas and Utsavas” 等が公開準備中である。

また、データベース公開のみならず、『華南研究プロジェクト』のように、ホームページを利用して国内外の関係諸機関との共同プロジェクトをも試験的に開始している。

なお、東文研ホームページ上から世界各地のアジア研究諸機関やアジア関係の新聞サイトへアクセスできるようになっている。

図書・資料情報としては、『東洋文化研究所所蔵 現代中国書目録』がすでに完成し現在実験運用中であり、近日中にオンラインで公開される。また、研究所に所蔵される貴重な蔵書目録も現在データベース化が進み、入力済み部分からオンラインでの利用が可能になっている。

事務情報としては、教官系・事務系が一体となり、各種事務情報のオンライン化が実現されている。

本研究所は、アジア関係の研究・資料情報の収集と蓄積、加工と発信の国際的基地としての役割を重視し、財政的にも人力的にも大きな困難を抱えつつも、そのような方向へと着実に事業を進めている。

東文研ホームページの URL は <http://culture.ioc.u-tokyo.ac.jp> あるいは <http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp> である。

VI 図書・資料

1. 図書

本研究所は、アジア諸地域に関する図書資料を約 51 万冊、雑誌を約 5,400 種所蔵している。とくに漢籍は今日では収集不可能な貴重なものが多く、日本では有数のコレクションである。その他に、中国語、朝鮮語、アラビア語、トルコ語、ベルシャ語、インドネシア語、サンスクリット語などの図書・雑誌も鋭意収集に努めている。

本研究所の図書・雑誌数は 1996 年 3 月 31 日現在、次のとおりである。

和・中・朝文図書	397,713 冊	
欧文図書	116,082 冊	計 513,795 冊
和文雑誌	1,679 種	
朝文雑誌	312 種	
中文雑誌	2,339 種	
欧文雑誌	1,128 種	計 5,458 種

この他、マイクロフィルム約 5,200 巻、マイクロフィッシュ約 111,000 枚を所蔵する。

主要所蔵図書

[大木文庫] 本研究所創設時に、大木幹一氏より中国法制関係書総数 3,168 部、45,452 冊の寄贈を受けた。公牘類の数百部は本文庫の柱梁をなし、法律関係の貴重書をはじめ、明清以後の時期の研究には不可欠の蒐集資料である。1959 年に『東京大学東洋文化研究所大木文庫分類目録』が編纂され、刊行された。

[帝国学士院東亜諸民族調査室旧蔵書] 1944 年帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない、その蔵書の和漢洋書・雑誌・資料等 2,000 冊が移管された。このなかには西欧におけるアジア諸民族研究の主要な文献が集められている。

[東方文化学院旧蔵書] 1929 年に、東方文化に関する研究機関として、外務省所管の東方文化学院東京研究所が創設されたが、1948 年に廃された。その旧蔵書

和漢洋あわせて 103,587 冊が、1967 年 3 月に本研究所に移管された。

[松本忠雄氏旧蔵書] 1949 年度科学研究費により松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書、雑誌など約 3,000 冊を購入した。とくに近代中国研究資料として重要なものがある。(整理中)

[長澤規矩也氏旧蔵書] 1951・53 両年度科学研究費により、長澤規矩也氏旧蔵の約 3,000 冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類である。1961 年 11 月、本研究所創立 20 年にあたり、同氏から約 150 冊の補充を得るとともに、『雙紅堂文庫分類目録』を刊行した。

[清野謙次氏旧蔵書] 1952・53 両年度科学研究費により、清野謙次氏旧蔵洋書 750 冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする。1978 年 3 月に『東京大学東洋文化研究所清野文庫分類目録』を刊行した。

[矢吹慶輝氏旧蔵書] 1952 年度科学研究費により、矢吹慶輝氏旧蔵洋書約 360 冊を購入した。英仏独のマニ教の文献を中心とし、仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

[下中文庫] 下中弥三郎氏より、1953 年 1 月から 1957 年 6 月までの、戦後出版の中国書 4,500 冊、中国雑誌 10 種および戦後出版の東洋関係洋書 130 冊の寄贈を受けた。とくに中国書は、当時入手できた書の主要なものをほとんど網羅している。

[東京銀行調査部旧蔵資料] 1959・60 両年度にわたり、東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和漢書・資料類約 18,000 冊の寄贈を受けた。

[仁井田陸氏旧蔵書] 本研究所名誉教授仁井田陸氏の逝去(1966 年 6 月)後、所蔵の中国書 5,000 冊、洋書 120 冊、和書 2,200 冊、清代公私文書類 900 余点、50 基の碑文の拓本を受け入れた。大木文庫とともに旧中国の社会研究に重要なものである。

[我妻栄氏旧蔵資料] 我妻栄氏の逝去(1973 年 10 月)後、所蔵の和洋法学文献および各種資料が東京大学に寄贈された際、本研究所はとくにアジア法制関係文献資料総数 647 部 932 冊の寄贈を受けた。1982 年 3 月に『我妻栄先生旧蔵アジア法制関係文献資料目録』を刊行した。

[倉石武四郎氏旧蔵書] 1975 年度に本学名誉教授倉石武四郎氏の漢籍を主とする蔵書を収蔵することとなり、1981 年度までにその重要な部分、漢籍約 4,300 点などを購入した。(整理中)

[江上波夫氏旧蔵書] 1981・82・84 各年度にわたり、本研究所名誉教授江上波夫氏の蔵書のうち、歴史学、民族学、考古学を中心とした洋書の一部約 2,550 点を購入した。

[Hans Daiber 氏旧蔵写本] 1986・87 両年度にわたり、東洋学文献センターと協力し、ハンス・ダイバー氏の蒐集した計 367 点の写本を購入した。イスラームの宗教、思想、歴史に関する重要な資料である。1988 年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber* を刊行した。

[文淵閣本四庫全書影印本] 1988 年度に文淵閣本四庫全書影印本（索引つき）全 1,501 冊を購入した。清代以前の中国の古典文献を網羅した最も基本的な叢書で、中国研究上不可欠の重要性をもっている。

[オランダ植民地省公文書索引およびジャワ官報] 1989 年度に、マイクロフィッシュ化された資料一式を購入した。前者はオランダ国立公文書館所蔵の旧植民地省文書（1850 年～1921 年）の索引書数百巻分を網羅し、後者はインドネシアのオランダ植民地政府が 1928 年～1939 年に公布した官報の集成である。（整理中）

[乾隆版大蔵経] 1990 年度に全 724 函（毎函 10 冊）、大清三蔵聖教目録一函（5 冊）を購入した。中国最後の木版大蔵経で、1,657 部の仏教典籍が収録されている。漢文の大蔵経で経版木が保存されているものは、高麗蔵とこの乾隆版のみで、きわめて貴重な資料である。

[Ouseley Collection] イギリスの外交官で東洋学者の G. Ouseley 卿（1744—1844）の旧蔵書の一部。17 世紀から 19 世紀にかけてのヨーロッパ人のインド、中近東への旅行記とペルシャ文学作品を主とした 60 点、全 106 冊からなる。Ouseley 自身の書き込みが随所に見られる点など、資料的価値が高い。

[南アジア伝導教団資料集成] 南アジア各地で伝導活動を行なったキリスト教団の、18 世紀末から 20 世紀までの年報、諸会議の議事録、往復文書、報告書等を含んだマイクロフィッシュ資料である。（整理中）

[Indonesian Monographs, 1945—1973] オランダの王立・言語・地理・民族学研究所が蒐集した、独立後インドネシアの社会科学関係出版物 3,258 点をマイクロフィッシュにまとめたもの。内容はきわめて多彩で、インドネシア現代史の研究に不可欠の資料集である。（整理中）

[故今堀誠二氏旧蔵書・資料] 広島大学名誉教授今堀誠二氏の逝去（1992 年 10 月）後、所蔵の漢籍 300 点、中国書 2,000 冊、文書資料 500 点を購入した。近現代中国の社会史資料、華僑史資料など多くの原資料を含む。（1994 年度一般設備費）

[Arabic Manuscripts (The Daiber Collection 2)] 本研究所所蔵の「Hans Daiber 氏旧蔵写本」を補完する、18 世紀を中心とする 12 世紀から 20 世紀初頭に至るアラビア語の写本 120 点の集成で、西アジア研究・イスラーム研究に不可欠

の一次資料である。(1994年度国立学校特別経費)

[東アジア宗族社会史関係資料] 東アジア全域にわたる宗族社会史の比較研究に重要な資料集。朝鮮族譜集成 494 冊，中国華南宗族社会史資料・南洋華僑・華人関係資料 2,263 冊からなる。族譜，社会，華人史の基本資料として貴重な資料である。(1995年度一般設備費)

[中国西北文献叢書] 陝西，甘肅，寧夏，青海，新疆などの中国西北地方に関する，歴史，地理，民俗，文学そのほかの諸分野の基本文献を網羅した叢書。(1995年度一般設備費)

以上の各コレクションのほか，1958年度から3カ年にわたって，文部省科学研究費による総合研究「アジア地域の社会・経済構造」の一環として，資料（主として洋書）1,800冊を購入し，また1961年度から1965年度まで機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」において，継続して資料の蒐集に努め，総数4,771冊に達した。

2. 資料

本研究所の所蔵する諸種の資料のうち，重要なものを以下に掲げる。

[殷代甲骨] 本研究所所蔵甲骨は，次の三部分からなる。第一は，故河井仙郎氏旧蔵の1,708片で，1979年に現蔵者井上富美子氏より寄贈された。第二は故田中慶太郎氏旧蔵の393片で，1979年に購入した。第三は旧蔵者三浦清吾氏より寄贈された2片である。合計2,103片に達し，京都大学人文科学研究所に次ぐ，わが国有数の蒐集である。これは，整理・綴合の上，松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』（東洋文化研究所報告1983年）として刊行された。

[中国歴史古銭・銭范] 旧東方文化学院の蒐集品で，殷代の貝貨，戦国時代の布銭・刀銭・郢爰からはじまり，歴代の代表的貨幣を収蔵する。約1,250点の古銭と，10点の銭の范模を含む。(整理中)

[中国考古資料] 上記の甲骨，古銭以外に，瓦当約110点，鏡，戈，戟，鏹などの青銅器，玉器，土器，磚，磚製買地券，壁面片，俑，仏像，衣服，室内装飾品，土俗品がある。大部分は旧東方文化学院が購入し，本研究所に移管されたものである。

[中国絵画資料] (原版・焼付写真・カラースライド等) 米国，カナダ，欧州，東南アジアの美術館，個人蒐集家が所蔵する中国絵画，および日本現存の中国絵画に関するものが主体で，その他に米国ミシガン大学アーカイヴより購入した中国絵画の焼付写真，東京国立文化財研究所原版からの焼付写真等があり，現在約

10万点にのぼる。「東洋学文献センター叢刊」として5冊の目録が1977～83年に刊行され、図録は『中国絵画総合図録』（全5巻）として東京大学出版会より1982年～83年に刊行された。

[中国清代・民国期の文書資料] 17世紀から20世紀におよぶ、北京をはじめ嘉興、武進、蘇州、通州、宝応、鳳山などの土地文書を中心とし、その他公私文書類約二千数百点がある。仁井田陞名誉教授旧蔵遺贈分や旧東亜研究所収集文書等を含む。目録と内容の一部は、1983年～86年に『東洋文化研究所所蔵中国土地文書目録・解説（上）（下）』（東洋学文献センター叢刊）として刊行された。（整理中）

[内蒙古出土学術資料] 江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・採集した資料約1万点が、1983年に寄贈された。主として土器片・陶器片である。資料の一部は江上氏のいくつかの論文に掲載されているが、圧倒的多数は未発表のものである。

[インド・イスラム史跡調査関係資料] デリーおよびインド各地に現存するサルタナット時代のムスリム遺跡に関する資料で、写真、実測図などが主なものである。1959年～62年度に「東京大学インド史跡調査団」が実施した現地調査の成果の一部である。

[西アジア考古資料] 古代イラン文明の研究を目的として、1956年以来「東京大学イラン・イラク遺跡調査団」が両国における遺跡14カ所を発掘・調査した結果、収集したもの。その数は数万点に達し、大部分は発掘品で、考古学上第一級資料である。

3. 図書室の利用状況

図書資料は広く内外の研究者に利用されている。1994年度と95年度の図書室の利用状況は次の通りである。

閲覧者数 () 内外国人内数

利用冊数

区分	学内	学外	計
1994年度	1,851 (465)	2,255 (269)	4,106 (734)
1995年度	1,697 (456)	1,869 (230)	3,566 (686)

	図書	雑誌	計
1994年度	22,130	9,786	31,916
1995年度	15,930	8,947	24,877

VII 外部評価

東洋文化研究所では、21世紀を展望した自己点検を進めてきているが、これに加えて、1994年10月13日の教授会において、外部評価を受けることを決定した。その後石井米雄上智大学教授を委員長とする日本人5名、外国人11名からなる評価委員会が組織された。1995年8月28日に6名の委員による準備会合が開かれた。そして、1995年9月12日から13日にかけて、外部評価委員16名と東洋文化研究所スタッフが参加した国際シンポジウム“Asia in the 21st Century: Toward a New Framework of Asian Studies”を開催するとともに、9月14日には評価委員による研究所スタッフとの意見交換、図書その他の施設の視察、そして外部評価委員会の全体会議が行われた。ここで、外部評価委員会の報告書の方針が決定されるとともに、起草委員が選抜された。また報告書は、英語を正文とすることも決定された。

起草委員会は、11月18日に第1回の委員会を開催し、各委員から提出された評価を検討するとともに、報告書の執筆を開始した。報告書原案が完成したのは、12月26日から27日の丸二日かけて行われた第2回起草委員会においてであった。この原案を各委員が再び検討したうえで、最終案が、石井委員長によってとりまとめられ、1996年2月26日、東洋文化研究所長に提出されたのである。

報告書は、「東洋文化研究所が内外のアジア理解の深化に対して絶大な貢献を行い、アジア研究において他の追随をゆるさぬ高い国際的評価をかちえてきた」と評価するとともに、最近の国際的研究環境の変化のなかで、「研究所全体としての対応ぶり」が、「総じて十分とはいえないのではないか」との指摘も行っている。現在の部門のそれぞれ、とりわけ汎アジア部門の役割や東アジア部門の位置づけについての検討が必要であること、また新たな研究分野に対応した新しい部門（東南アジアや中央アジア）の設置などの必要性が指摘された。研究所の活動をより国際的なものにする必要性は、大きくとりあげられ、外国人客員部門の設置、英文などによる出版のための措置などが望ましいと提言された。その他、研究所スタッフの個人研究と共同研究の関係、助手制度の見直し、研究補助体制

の確立、蔵書の改善、研究所と東京大学の大学院教育との関係、東洋学文献センターの改善などについて提言がなされた。

この提言を受けて、研究所では、さまざまな改革の議論が開始された。

外部評価委員

- | | |
|------------------------|--|
| 石井 米雄 | 上智大学外国語学部教授、京都大学名誉教授 |
| 安 秉直 (Ahn Byong-Jick) | ソウル大学校経済大学教授 |
| Massoud Daher | Professor of the Contemporary History of Lebanon and the Orient Arab, Department of History, Lebanese University |
| Mohammad Estelami | Professor of Persian Literature, Tokyo University of Foreign Studies |
| Dwijendra Narayan Jha | Professor of History, Department of History, University of Delhi |
| Jomo K. S. | Professor, Faculty of Economics and Administration, University of Malaya |
| 上岡 弘二 | 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所教授 |
| 清川 雪彦 | 一橋大学経済研究所教授 |
| 林 非 (Lin Fei) | 中国社会科学院文学研究所教授 |
| Joseph P. McDermott | University Lecturer, Faculty of Oriental Studies, and Fellow of St. John's College, Cambridge University |
| 中根 千枝 | (財)民族学振興会理事長、東京大学名誉教授 |
| Gilbert Rozman | Musgrave Professor of Sociology, Princeton University |
| 石 守謙 (Shih Sohu-chien) | 国立台湾大学芸術史研究所教授 |
| 沈 祖煒 (Shen Zuwei) | 上海社会科学院経済研究所教授 |
| Elizabeth Sinn | Chairman, Hong Kong Studies Seminar Programme, Centre of Asian Studies, University of Hong Kong |
| 梅原 郁 | 京都大学人文科学研究所教授 |

VIII 研究活動

A 部門研究

汎アジア部門

原 洋之介	猪口 孝	田中 明彦
原田 至郎 (96年4月から)	松井 健	末成 道男
関本 照夫	岡本 サエ	

汎アジア部門はアジアという対象を、経済学・政治学・人文地理学・文化人類学・比較思想という社会科学・人文科学の広い範囲にわたり、個別専門分野ならびに学際領域の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。この部門は日本も重要な研究対象としている。

経済・統計研究分野は、アジア諸国経済発展の実証的な比較研究を通して、アジア諸国経済発展のアジア域内および世界における国際的位置づけを明らかにするとともに、欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。国際政治分野では、アジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的に行っている。人文地理学研究分野は、アジア諸地域におけるフィールドワークに基づいて、社会の全体像を描き、記述にかかわる理論研究を推進するとともに、地域研究の深化を目指す。アジア地域の自然と文化の統合的全体を展望することを目標とする。文化人類学研究分野は、アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし、ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの方法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて、下からあるいは周縁から、よりマクロな社会の全体像を見透かそうとしている。比較思想研究分野は、東アジアの思想交流の中にみられる、漢字文化圏の諸民族の思惟的特徴を研究する。

アジア諸地域における社会・文化の変容過程

アジア諸国経済発展の比較研究

原 洋之介 アジア諸国の工業化と国際貿易

アジアにおける政治変動と国際関係

田中 明彦 東アジアをめぐる主要国間の国際政治

原田 至郎 アジアにおける国際紛争

アジアにおける都市と農村

松井 健 西南アジアの都市と遊牧民

アジア諸社会の固有文化とその変容

末成 道男 東アジア社会の変容過程

関本 照夫 インドネシア社会の統合過程

アジアにおける思想・文化の比較研究

岡本 サエ 東アジアの比較思想

東アジア部門（第一）

濱下 武志	黨 武彦 (96年3月まで)	青木 敦 (96年3月まで)
宮脇 博史	川村 康 (95年3月まで)	松丸 道雄 (95年3月まで)
平勢 隆郎	吉開 将人 (95年4月から)	

東アジア第一部門は、中国、朝鮮、日本、ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ、社会科学、歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を把握することを目標とする。この研究では、とくに東アジア第二部門と協力して、学際的な地域研究による生きた全体像をめざすことは言うまでもない。研究分野としては、経済・社会、政治過程、歴史、考古を包含し、「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として、共同研究を継続している。この部門では、「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」（主任濱下）、「朝鮮伝統社会の構造とその変容」（主任宮脇）、「殷周社会の総合的研究」（主任松丸 95年3月まで）、「中国出土文字史料とその歴史的背景」（主任平勢）等の研究班を組織し、本学内外の協力を得、継続して研究をすすめている。

東アジアにおける国家権力と社会経済構造

濱下 武志	中国近代の経済発展
黨 武彦	清代中国の社会経済
青木 敦	宋元時代の政治と社会
宮脇 博史	近代朝鮮の社会経済構造
川村 康	唐宋時代の法制度
松丸 道雄	中国古代国家の形成
平勢 隆郎	中国古代帝国の形成
吉開 将人	中国古代国家と手工業

東アジア部門（第二）

蜂屋 邦夫	丘山 新	鈴木 隆泰 (96年7月から)
丸尾 常喜	尾崎 文昭 (96年4月から)	笠井 直美
小川 裕充	林 秀 薇 (95年3月まで)	

東アジア第二部門は、中国を中心とする東アジア地域の思想、宗教、文学、美術を研究対象とする部門である。部門研究としては「庶民文化の形成と展開」を課題としている。

一般的に中国では、権力エリートと文化エリートとは分離せずに癒着しており、したがって権力エリートは文化を独占して、庶民は非文化的階層とみなされてきた。しかし、庶民は文化獲得の努力をくり返して行ない、権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは権力エリートからは非正統的な文化とみなされ、強く意識されなかったにせよ反権力的指向をもっていた。「庶民文化」は六朝から唐末までに形成され、宋元以後にめざましく発展し、各地方に広がっていたと考えられる。

この課題に対して、各研究分野で独自の検討をするとともに、共同してその解明をめざしている。

東アジアにおける庶民文化の形成と展開

蜂屋 邦夫	庶民における三教思想の受容
丘山 新	仏教經典の民衆化
鈴木 隆泰	インド大乘經典の形成過程

丸尾 常喜	中国近代文学における民衆文化の諸問題
尾崎 文昭	近現代中国における小説の認識
笠井 直美	水滸説話の形成と展開
小川 裕充	明清の職業画家
林 秀薇	宋元の道釈画

南アジア部門

加納 啓良	高橋 昭雄 (96年4月から)	柳澤 悠
中里 成章 (94年10月から)	井坂 理穂 (95年4月から)	上村 勝彦
永ノ尾信悟		

南アジア部門は、東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人々が複雑な社会を形成したうえ、欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て、戦後あいついで独立した諸国からなる地域であるので、今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため、本部門は政治・経済・社会・文化などにわたって過去現在の両者を総合的に研究している。

本部門では、とくに「環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯」を課題として研究を進めてきた。このため、年に数回、部門の構成員が参加して、この課題のもとに部門研究会を開催している。さらにまた、深く分析、検討をするために、所外の研究者の協力を得て研究班を組織し、それぞれ新しい角度から問題を提起し、それについて実証的かつ理論的に検討を行っている。

環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯

加納 啓良	インドネシアにおける植民地支配と農業問題
高橋 昭雄	市場経済体制移行下のミャンマー農村経済
柳澤 悠	近現代インドの経済構造
中里 成章	インドにおける植民地支配体制と社会構造
井坂 理穂	植民地期のインドの政治と社会
上村 勝彦	古代インドの文学と社会
永ノ尾信悟	古代インド社会と祭式
原 洋之介	東南アジアの支配体制と経済発展

西アジア部門

鈴木	董	長澤 榮治 (95年4月から)	松谷 敏雄
羽田	正	山中由里子	後藤 明
鎌田	繁	森本 一夫 (96年4月から)	

西アジア部門は、アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域、いわゆる中近東を研究対象とし、あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この広大な地域の政治、経済、文化、社会を、学際的研究によって総合的に理解し、その特質を解明することが本部門の目的である。そのために各自が独自の立場から個人研究を行うとともに、「西アジア文化の歴史的形成と現代的課題」を共通の研究題目とする共同研究が実施されている。

西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

鈴木 董	オスマン帝国の政治社会史的研究
長澤 榮治	近現代アラブの社会経済史的研究
松谷 敏雄	北シリアにおける農耕・牧畜の起源について
羽田 正	イラン・イスラム社会の特徴
山中由里子	西アジアにおける英雄物語の比較研究
後藤 明	初期イスラム社会史
鎌田 繁	イスラム神秘思想の構造と展開
森本 一夫	イスラム世界における聖性の研究

B 長期国際共同研究

1993年度から開始された二つの長期研究を、本研究所の研究スタッフ全員が取り組むプロジェクトとして続行中である。今日のアジアの激動の焦点であるイスラーム圏と中国を中心にして、中央アジア、東北アジアをも、イスラームと中国という2つの切り口から分析することを目指している。なお1996年度から「環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動」が開始され、イスラーム圏と中国の間に位置する南アジア・東南アジア地域の歴史と現状を総合的に描き出すことを試みている。（*は学外の研究協力者）

中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究

委員長 濱下 武志		
宮嶋 博史	✧菅谷 成子	加納 啓良
平勢 隆郎	✧飯島 渉 (96年度から)	高橋 昭雄 (96年度から)
吉開 将人	✧谷垣真理子	✧重松 伸司
✧青木 敦	蜂屋 邦夫	鈴木 董
✧黨 武彦	丸尾 常喜	末成 道男
✧黒田 明伸	尾崎 文昭 (96年度から)	岡本 サエ
✧弘末 雅士	小川 裕充	原 洋之介
✧金 鳳 珍	丘山 新	田中 明彦
✧Christian A. Daniels	笠井 直美	原田 至郎 (96年度から)

激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究

委員長 鈴木 董		
平勢 隆郎	松谷 敏雄	✧臼杵 陽
✧黨 武彦	後藤 明	✧Modjtaba Sadria
丘山 新	鎌田 繁	✧中田 考
上村 勝彦	羽田 正	原 洋之介
柳澤 悠	長澤 榮治	関本 照夫
加納 啓良	山中由里子	松井 健
永ノ尾信悟	森本 一夫 (96年度から)	✧松原 正毅 (96年度から)
✧小倉 泰	✧小杉 泰	✧木村 喜博 (96年度から)
✧黒田 卓	✧柳橋 博之 (96年度から)	

環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動

委員長 加納 啓良		
高橋 昭雄	原 洋之介	関本 照夫
柳澤 悠	猪口 孝	岡本 サエ
中里 成章	田中 明彦	
井坂 理穂	原田 至郎	
上村 勝彦	松井 健	
永ノ尾信悟	末成 道男	

C 班研究

各専門分野の研究を推進し所外の研究者との交流を深めるため、所員を主任とする班研究会が特定のテーマごとに数多く設置されている。所外の参加者には東京大学の他部局に属する「研究担当者」と、その他の教育・研究機関に属する「研究協力者」の双方が含まれる。1995、1996両年度における班研究会の組織状況は、次のとおりである。(○は研究担当者、*は研究協力者。途中で所属先が変わった者については、変更後の所属先にもとづいて分類。)

東アジア研究における人類学と歴史学の接点 主任 末成 (1995年度で終了)

人類学は、文字をもたない未開社会を主たる対象として発展してきたが、未開社会自体が文字社会となり、また文明社会も重要な研究対象とされるに至って、文献資料の利用の必要性は、増大している。また、歴史学も、社会史を中心に、従来の文献史学の枠にとらわれない研究が注目されるようになっている。とくに、漢字という共通の媒体をもつ東アジアにおいては両者の関係が深く、どのような交流が可能かを追究する。

末成 道男	* 桐本 東太	* 宮永 國子
* 上田 信	* 嶋 陸奥彦	* 王 崧 興
* 片山 剛	* 瀬川 昌久	

外から見たベトナム社会 主任 末成

ベトナムの社会・文化は、二千年余り中国の影響を直接、間接に受けて形成してきたが、その構造的特徴において、韓国や日本あるいは東南アジア諸国と類似する点が少なくない。本格的なフィールドワークが、最近まで不可能であったため、人類学的現地調査が著しく立ち遅れている。このような状況をふまえて、現在利用できる資料を用いて、それぞれの地域の専門家が多面的な視角をもってベトナムの特性の解明を試みる。

末成 道男	* 片山 剛	* 田村 克己
笠井 直美	* 菊池 秀明 (96年度から)	* 中西 裕二 (96年度から)
青木 敦 (95年度まで)	* 嶋 陸奥彦	* Shaun K. Malarney (96年度から)
黨 武彦 (95年度まで)	* 嶋尾 稔 (96年度から)	* 王 崧 興 (95年度まで)
吉開 将人 (96年度から)	* 瀬川 昌久	* 横山 廣子 (96年度から)
* 板垣 明美 (96年度から)	* 武内 房司	

アジア諸社会における文化像の生産と消費 主任 関本

国民国家体制ができあがり近代的マスメディアが急速に発達しているアジアの諸社会では、国ごとに、またその内部の諸地域ごとに、文化的自己主張がさかんにになっている。国の文化政策、国家内部の文化をめぐる政治、トランス・ナショナルなメディアや大衆文化の影響などから、現代アジアの文化状況をさぐる。

関本 照夫	○ 山下 晋司	* 塩田 光喜
松井 健	* 内堀 基光	* 清水 展
○ 船曳 建夫	* 落合 一泰	* 富沢 寿勇
○ 中村 雄祐	* 葛野 浩昭	* 福嶋 真人

「自然」観の通文化的研究 主任 松井

生活環境の悪化、自然破壊、乱開発、資源枯渇とその一方での蕩尽などの問題を通して、「自然」は現代の最重要の思想課題となっているとあって過言ではない。これらの諸問題に対して、環境保全や自然保護が訴えられるが、これはまっ

たく欧米的な「自然」観に支えられた思想と実践にはかならない。これに対して、非欧米地域には、それぞれの固有文化にはぐくまれた多様な「自然」観とそれにもとづく実践が認められ、これらを明らかにすることによってより豊かな自然とのかかわり方のイメージを探ることを課題としたい。

- | | | |
|---------------------|---------|---------------------|
| 松井 健 | * 篠原 徹 | * 松原 正毅 |
| 永ノ尾信悟 | * 菅原 和孝 | * 宮岡 伯人 |
| * 太田 至 | * 菅 豊 | * 山本 紀夫 |
| * 掛谷 誠 | * 須藤 健一 | * 竹川 太介
(96年度から) |
| * 栗田 和明 | * 武田 淳 | |
| * 小長谷有紀
(96年度から) | * 松田 清 | |

構造調整下のアジア経済の展望 主任 原

アジア地域全体で現在おこなわれている構造調整政策と市場経済移行政策とを比較の視点から解明していく研究班である。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 原 洋之介 | * 石田 正昭 | * 杉本 義行 |
| ○ 田嶋 俊雄 | * 今岡日出紀 | * 福井 清一 |
| ○ 藤田 夏樹 | * 新谷 正彦 | * 本台 進 |
| ○ 永田 信 | | |

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治 主任 田中

この研究会は、1994年9月から1995年8月まで、田中が長期海外出張のため、活動を停止していたが、95年9月以後は、毎月一回研究会を行い、特に日米関係と朝鮮半島情勢、中国（台湾、香港を含む）情勢を中心に現状分析を行った。96年度も引き続き日米関係、朝鮮半島情勢、中国情勢を中心に検討をする。

- | | | |
|-------------------|---------------------|---------------------|
| 田中 明彦 | * 浅野 亮
(96年度から) | * 小島 朋之
(95年度まで) |
| 原田 至郎
(96年度から) | * 伊豆見 元 | * 瀬島 誠
(96年度から) |
| ○ 古田 元夫 | * 岩田 賢司
(95年度まで) | * 谷垣真理子 |
| ○ 山影 進 | * 河合 弘子
(96年度から) | * 藤井 新 |

世界システムの諸類型 主任 田中 (96年度から発足)

この研究会は、1996年度に発足する班研究会であるが、目的は、かつて地球上に存在したさまざまな世界システムについて、それぞれの特徴と動態を明らかにするという野心的なものである。当面、諸世界システムの類型化のための理論的検討と、古代中国、古代ギリシア、古代インド、イスラム世界、ヨーロッパ中世、前近代東アジアなどの世界システムの概括的検討を行う予定である。

田中 明彦	鈴木 董	濱下 武志
上村 勝彦	原田 至郎	平勢 隆郎

比較文化研究の方法 主任 岡本

学問領域の複合化と学際化に伴う「比較諸学」と、広い視野をもった比較文化研究という二つの面を、専攻の異なるアジア研究者が話し合う広場として出発した。その成果の一端をディシプリン（理論）とケーススタディ（個別研究）の双方からまとめて、特集「比較文化の方法—アジアの視角から」『東洋文化』75に発表した。96年は、研究会と並行してアジア比較文化の資料解題に取り組む。

岡本 サエ	○川原 秀城	*田辺 勝美
鈴木 董	○佐藤 慎一	*西原 大輔 (96年度から)
岡本 照夫	*加藤 祐三	*吉田 忠
原 洋之介	*小宮 彰	
宮嶋 博史	*清水 学	

中国出土文字史料とその歴史的背景 主任 平勢

本研究は、中国古代出土文献史料の重要性が日益に高まっている現状に鑑み、当該史料の活用をはかり伝存史料との接点を探ることを基礎作業とし、各自のテーマについての討議を進め、問題点を整理する。主として討議の対象としたのは、平勢の進めている戦国紀年整理に関わる問題である。すでに公表し、あるいは公表しつつある整理作業と六国文字との接点を議論した。

平勢 隆郎	*影山 輝国	*原 宗子
-------	--------	-------

吉開 将人	* 窪添 慶文	* 工藤 元男 (96年度から)
○尾形 勇	* 谷 豊信	* 鶴間 和幸 (96年度から)
* 飯尾 秀幸		

内蒙古出土学術資料の調査研究 主任 後藤

江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・収集した学術資料を点検し、その学術的価値を確認して、内外の研究者の利用の便に供することを目的としている。

後藤 明	吉開 将人	* 中見 立夫
平勢 隆郎	* 高濱 秀	* 林 俊雄
○末木文美士		

道家道教思想の総合的研究 主任 蜂屋

1992年度から94年度にかけて行なった中国道教の現地調査の検討を含めながら、後漢以降の道教史、道教思想史について、各方面の専門家に参加してもらって総合的に検討している。

蜂屋 邦夫	* 菅野 博史	* 藤本 幸夫
丘山 新	* 高橋 忠彦	* 前田 繁樹
○池田 知久	* 中嶋 隆蔵	* 松岡 栄志
○末木文美士	* 原田 二郎	* 吉田 純
* 末岡 実		

東アジアにおける仏教経典の受容 主任 丘山

中国における仏教経典の翻訳と受容、および朝鮮、日本への伝播と受容に関わる諸問題を検討することにより、東アジア諸地域の宗教文化のそれぞれの特質を解明することを目的とする。そのために、インド研究者などの協力をも得て漢訳仏典の解読を中心に共同研究を進めている。

丘山 新	* 小川 隆	* 河野 訓
○下田 正弘	* 神塚 淑子	* 前川 亨
* 岩松 浅夫	* 辛嶋 静志	

華南の地域社会と地方文学 主任 丸尾

地域社会に視点を据えた俗文学研究という立場から、江蘇、浙江、安徽の江南地区から、広東、福建に至る華南地域全体について、地域社会の構造と方言、口承文学の関係を広く検討する。

丸尾 常喜	○大木 康	*大塚 秀高
岡本 サエ	○戸倉 英美	*高島 俊男 (95年度まで)
笠井 直美	○廣瀬 玲子	*西川喜久子
末成 道男	*上田 望	*松岡 俊裕
濱下 武志	*大里 浩秋	

中国一九三〇年代の文学 主任 丸尾

1930年代を中心にしつつ、広く中国現代文学の実証的な研究を目的とし、雑誌『現代』の輪読を軸に研究報告会、合宿などを行う。

丸尾 常喜	○藤井 省三	*坂井 洋史
尾崎 文昭	*芦田 肇	*佐治 俊彦
○刈間 文俊	*伊藤 徳也	*清水賢一郎
○櫻庭ゆみ子	*大滝 幸子	*鈴木 正夫
○代田 智明	*近藤 龍哉	

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究 主任 濱下

東洋文化研究所が所蔵する仁井田陞博士コレクションの土地契約文書の解読研究から出発した本研究班は、その後東洋学文献センター叢刊などにおいて解題・目録を作成した。その他商業文書、日用文書などを継続的に研究する。

濱下 武志	*川村 康	*張 士 陽
宮脇 博史	*久保 亨	*寺田 浩明
○石川 洋	*上田 信	*黨 武彦
○岸本 美緒	*白井佐知子	*Linda Grove
*青木 敦		

現存する中国絵画の包括的再検討 主任 小川

本研究班は、東アジア美術研究室中国絵画写真アーカイヴをさらに充実させるため、国内外の公私の中国絵画コレクションの調査撮影を実行する母胎となっており、1990年度にヨーロッパ、91年度にアメリカ・カナダ、92年度に東アジア、92・93・94年度に国内の抜本的再撮影を行ない、多大の成果を上げることができた。現在、その成果を承けて、収集資料の整理を鋭意継続中である。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 小川 裕充 | * 救仁郷秀明 | * 湊 信幸 |
| * 板倉 聖哲 | * 嶋田 英誠 | * 宮崎 法子 |
| * 井手誠之輔 | * 関口 正之 | * 林 秀 薇 |
| * 海老根聡郎 | * 藤田 伸也 | |

朝鮮伝統社会の構造とその変容—方法論的探究 主任 宮嶋

この研究班は、李朝期から植民地期にかけての朝鮮社会の変動を、伝統社会の構造に規定された独特の変動過程であったことを多面的に明らかにすることを目的としている。これは従来、ヨーロッパや日本を基準として朝鮮伝統社会の近代の変容度を考察してきた研究方法の批判的克服をも目指したものであり、班メンバーおよび若手の院生の研究発表を行っている。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 宮嶋 博史 | * 趙 景 達 | * 山内 弘一 |
| ○小川 晴久 | * 月脚 達彦 | * 尹 健 次 |
| ○吉田 光男 | * 並木 真人 | * 吉野 誠 |
| * 康 成 銀 | | |

植民地期南アジア像の再検討—経済と政治 主任 柳澤

植民地期の南アジアの経済と政治に関する過去10年間の研究の進展は目ざましく、従来の認識を大幅に変更するものとなっている。人口史や飢饉史など新たな分野の研究も登場してきた。本研究会は、これらの新たな研究動向の展開を整理して、植民地期の政治経済像の再検討と新たな構築を模索する。

- | | | |
|--------|---------|---------|
| 柳澤 悠 | * 佐藤 宏 | * 山本由美子 |
| 井坂 理穂 | * 竹中 千春 | * 脇村 孝平 |
| ○粟屋 利江 | * 水島 司 | |

南アジアにおける経済発展と国民形成（1930年～1990年）

主任 中里（96年度から発足）

最近のインド経済自由化への急激な動きは、南アジアの経済と政治がかつてない転換期にたたさされていることを示している。本班研究は、独立前の模索の段階を経て独立後独特のかたちで発展を遂げた、南アジアの国民経済と国民国家のシステムにいかなる問題があったのか、歴史研究者と現状研究者が協力して今日の視点から再検討することを目的とする。

中里 成章	* 押川 文子	* 藤井 毅
○長崎 暢子	* 黒崎 卓	* 脇村 孝平
○藤田 幸一	* 近藤 則夫	

インド古代叙事詩の研究 主任 上村

ヒンドゥー教を研究する上で最も基本的な資料である二大叙事詩『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』を中心に、古代インドから近代インドに至るまでのインドの思想、宗教、文化を通観することを目的とする。そのために、ヴェーダ、仏教、法典、美術建築、宗教儀礼、ヒンディー文学の研究者の協力を得て、班主任は叙事詩そのものとサンスクリット古典文学の分野を担当している。

上村 勝彦	* 小倉 泰	* 水野 善文
永ノ尾信悟	* 金 漢 益 (96年度から)	* 渡瀬 信之
○入山 淳子 (96年度から)	* 羽矢 辰夫	* 山崎 元一 (95年度まで)
○土田龍太郎	* 松原 光法	

南アジア文化の形成、伝承、現状 主任 永ノ尾（95年度で終了）

「インド文化の形成と現状」（1994年度まで）は、インド文化を、宗教儀礼に焦点をあわせて考察してきたが、その知見をもとに、インドの文化をより広い視野にわたって見すかすために、さまざまな文化事象を、古典文献学と人類学の研究者達の共同研究のかたちですすめて、伝統社会の文化研究の論理と方法を構築することをめざす。

永ノ尾信悟	* 小倉 泰	* 高島 淳
上村 勝彦	* 長田 俊樹	* 田辺 明生
○横地 優子	* 後藤 敏文	* 森 雅秀
* 石井 溥	* 島 岩	* 八木 祐子
* 臼田 雅之	* 関根 康正	* 山下 博司

南アジアとイスラーム 主任 永ノ尾 (96年度から発足)

パキスタンとバングラデシュをふくむ南アジアはイスラーム教徒が最も多い地域である。独立後のインドにおいてもイスラーム教徒はなお人口の1割を構成する。13世紀以降に本格的に接触をはじめたイスラーム文化は南アジアの文化に多大な影響を与えた。この班研究は、13世紀以降の南アジアにおけるイスラーム文化とヒンドゥー文化の接触、変容の過程をさまざまな視点から分析していく。

永ノ尾信悟	羽田 正	* 石井 溥
鎌田 繁	松井 健	* 関根 康正
中里 成章	柳澤 悠	* 山下 博司

東南アジア近現代史像の再検討 主任 加納

第二次世界大戦後の欧米植民地支配の崩壊から半世紀を経て、東南アジアの政治、経済、社会は大きな変貌を遂げた。おおむね植民地時代に形成された国境・領土の枠組みを踏襲しながら、国民国家の形成と脱植民地化が強力に進む一方、ASEANを中心とする最近の経済発展は東南アジアの社会構成を土台から変えつつある。このような時代状況を踏まえて、多面的な角度からこの地域の近現代史像を再検討しようとしている。

加納 啓良	○ 中西 徹	* 小泉 順子
高橋 昭雄 (96年度から)	○ 藤原 帰一	* 白石 昌也
○ 桜井由躬雄	○ 古田 元夫	* 土佐 弘之
○ 末廣 昭	* 浅見 靖仁	

アジア都市比較の課題と方法 主任 鈴木

アジア諸地域の都市の特質について、アジア専門家とアジア以外の地域の専門家の協力により、解明を加えることをめざし、研究会を持つこととしている。

鈴木 董	* 生田 滋	* 清水 展
羽田 正	* 小倉 泰	* 陣内 秀信
松井 健	* 黒木 英充	* 妹尾 達彦
○大木 康	* 坂本 勉	* 林 佳世子
○本村 凌二		

近代アジア社会研究の方法的課題 主任 濱下

班員が研究対象とするアジア諸地域社会をその内的構成において検討すること、またそれらの近代という問題へのかかわり方を様々な角度から討論し、さらに地域間で比較検討をおこない、アジア社会研究の方法的課題を明らかにする。

濱下 武志	中里 成章	宮嶋 博史
加納 啓良	原 洋之介	柳澤 悠
鈴木 董		

ジャーヒリーヤからイスラームへ 主任 後藤

イスラーム世界の歴史認識では、歴史はイスラーム以前とイスラーム以後とに二分される。前者から後者への変化は、7世紀にアラビアで始まった。歴史の個々の場面での変化はしかし、数世紀の幅をもって表面化する。イスラーム以前と以後の時代の変化を、政治、経済、社会、思想、文学など多様な側面から検討するのが本研究の目的で、定例研究会での研究発表を中心に、研究が続けられた。

後藤 明	* 佐々木淑子	* 花田 宇秋
○蔀 勇造		

比較イスラム制度史の研究 主任 鈴木

前近代イスラム世界の諸制度の形成・伝播・発展について、政治制度を中心に比較史的検討を行うことをめざしている。

- | | | |
|------|---------|---------|
| 鈴木 董 | * 私市 正年 | * 林 佳世子 |
| 羽田 正 | * 花田 宇秋 | * 三浦 徹 |
- 佐藤 次高

都市社会と宗教施設 主任 羽田

イスラム世界の都市においては、モスク、マドラサ、聖廟などの宗教施設が社会的に重要な意味を持っている。本班研究では、イスラム世界各地の専門家の共同討議によって、1. 建築史的な側面、2. 都市社会における機能、の2つの方向からこれら宗教施設の社会的機能を解明することを目的としている。

- | | | |
|-------------------|---------|-------------------|
| 羽田 正 | ○ 藤井 恵介 | * Modjtaba Sadria |
| 森本 一夫
(96年度から) | * 小倉 泰 | * 林 佳世子 |
| 山中由里子 | * 私市 正年 | * 三浦 徹 |
- 小松 久男

欧文ペルシア旅行記の研究 主任 羽田

15世紀以来数多く記されてきた欧文によるイラン旅行記に関する情報を集積し、その特徴を文献学的に解明することとともに、従来必ずしも積極的にイラン研究に用いられてはいないその記述を多角的に利用して、イラン社会の特徴を明らかにすることを目指す。

- | | | |
|-------|---------|---------------------|
| 羽田 正 | ○ 山岸 智子 | * 佐々木康之
(93年度まで) |
| 山中由里子 | * 近藤 信彰 | |

中東の社会変容と思想運動 主任 長澤 (96年度から発足)

東アラブを中心として、近代以降の中東の社会経済変容と政治社会思想の展開

の相互の関係を、各地域の事例研究に依拠して比較考察する。

長澤 榮治	* 岡野内 正	* 栗田 禎子
* 臼杵 陽	* 加藤 博	* 福田 安志

イスラム史料の総合的研究 主任 鈴木

イスラム圏の諸史料の史科学的検討をめざし、現在は、オスマン語史料につき、オスマン史以外の専門家も含めて、史料講読会をもち、史科学的検討を進めている。

鈴木 董	* 私市 正年	* 林 佳世子
羽田 正	* 黒木 英充	* 三沢 伸生
* 加藤 博	* 坂本 勉	* 八尾師 誠

ダイバー写本コレクションの文献学的研究 主任 鎌田

本研究所が1986-87年および1994-95年の2度にわたって購入収蔵したダイバー氏旧蔵のアラビア語を中心とした写本を活用して、イスラーム文化の諸相を班員のそれぞれの立場から文献学的アプローチを主な方法として調査研究を進めることがこの班のねらいである。各メンバーが個別的に自己の研究を深めているのが主要な活動であるが、同時に班員に限定せず、より広い範囲の研究者をも交えた研究会を開催する。

鎌田 繁	○ 竹下 政孝	* 中田 考
後藤 明	○ 中村廣治郎	* 林 佳世子
○ 佐藤 次高	* 小林 春夫	* 藤井 守男
○ 杉田 英明	* 東長 靖	

東文研所蔵東京銀行寄贈図書の調査・研究 主任 宮嶋 (95年度で終了)

本研究所に所蔵されている東京銀行（旧横浜正金銀行）寄贈図書の整理と、より有効な利用を目指して作業を行った。また旧国策銀行としての横浜正金調査部が、戦前日本の対外政策上、シンクタンクとしての役割をいかに遂行したのかに

ついて研究会をもった。

宮嶋 博史	濱下 武志	○末廣 昭
加納 啓良	柳澤 悠	○武田 晴人
鈴木 董		

附属東洋学文献センター

データベース作成とネットワーク 主任 岡本

アジア研究に必要な「資料収集とデータベース」研究班として出発し、学内外のメンバーの協力を得て情報処理、書誌、目録について研究し、本研究所附属文献センターで作業を進めている「現代中国書データベース」(96年度完成予定)を側面から支援している。96年度からは班名称を上記に変更し、研究所のデータベースとネットを利用したドキュメンテーションサービスの可能性について、パイロットスタディを行う。

岡本 サエ	田中 明彦	○大木 康
丘山 新	黨 武彦 (95年度まで)	*大塚 秀高
加納 啓良	羽田 正	*官 寧
鎌田 繁	永ノ尾信悟	*山田 直子

D 定例研究会

本研究所では、毎年5~6回の頻度で、研究所スタッフ全員の参加する定例研究会を開催している。5つの研究部門の各々が輪番制により毎年1回、部門構成員のいずれか1名の研究報告をこの研究会で行うのが慣例となっている。また毎年度末には、定年退官する教官の最終研究発表会を催している。過去2年間の開催状況は次のとおりである。

1994年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
7月14日	南アジア	永ノ尾信悟	ヒンドゥー儀礼の形成

9月22日	西アジア	鎌田 繁	イマーム論の思想構造について
10月13日	汎アジア	原 洋之介	経済発展の地域性
11月24日	東アジア1	青木 敦	中国前近代史における宋朝の位置
2月15日	東アジア2	林 秀薇	渴筆による白描中国山水画の形成 について

1995年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
6月22日	西アジア	長澤 榮治	エジプト知識人と民衆的遺産
7月13日	汎アジア	松井 健	ナツメヤシ・オアシスの生活世界
9月28日	東アジア1	黨 武彦	清代における地域行政
10月12日	東アジア2	小川 裕充	宋元山水画における構成の伝承
11月 9日	南アジア	中里 成章	第二次大戦期インドの戦時経済

1994年度退官記念最終発表研究会

3月9日 松丸道雄教授 殷周秦における漢字の正統書体の伝流

E 内外学術研究・調査

1. 特別事業費による海外現地研究

関本照夫 (1995. 2. 26~3. 24)

インドネシア伝統工業、とりわけパティック産業の社会史と華人が果たしてきた役割について、インドネシア・香港で調査、資料収集を行った。

羽田 正 (1995. 3. 2~4. 5)

シャルダンによる17世紀後半のイスファハーンの描写を、現地と他の文献で検討、確認するために、イランのイスファハーンとフランスのパリを訪れた。

上村勝彦 (1995. 11. 27~12. 21)

インドのマドラスで、アディヤル・ライブラリーとクップスワーミー・シャー

ストーリー研究所所蔵のサンスクリット文献の調査、およびイスラム教の支配者によるサンスクリット演劇論の研究を行った。

丸尾常喜 (1996. 3. 27～4. 30)

中国北京で20日間にわたり資料調査、研究交流を行ったほか、天津、上海、杭州、紹興、余姚、富陽を訪問して調査を行い、北京大学、南開大学、復旦大学、華東師範大学などで8回の講義を行った。

小川裕充 (1996. 3. 29～5. 18)

清朝内府蔵品を継承する台北故宮博物院名品展が、1995年3月よりアメリカで開催されるのを機会に、同院所蔵中国絵画、及びアメリカ・カナダ所在中国絵画の調査を行った。

2. 特定研究経費による研究・調査

岡本サエ「東京大学所蔵現代中国書データベースシステムの作成」

研究代表者: 岡本サエ

本計画は、将来学術情報センターに登録し得る現代中国書データベース作成を目標として、本研究所に所蔵される現代中国書約4万点をデータベース化し、それによって当研究所附属東洋学文献センターで準備している『東洋文化研究所現代中国書分類目録』の作業を支援するため1993年度から実施された。本研究で作成されたデータベースは上記目録の電子出版に活用するとともに、学内外の研究機関に磁気媒体またはインターネットで提供することを見込んでいる。

1994年度464万円

小川 裕充「『中国絵画総合図録 改訂増補版』編集と同図録画像データベース作成作業」

研究代表者: 小川裕充 研究分担者: 板倉聖哲

本計画は、無慮10万点に及ぶ東アジア美術研究室所蔵中国絵画写真資料に、世界各地のコレクションの第2次包括的調査によって新たに収集した実写写真資料1万2千点余りを加えて、『中国絵画総合図録』改訂増補のための編集作業を行い、併せて資料の画像データベース化のための基本カードを作成しようとするものである。

1995年度610万円

3. 文部省科学研究費による研究・調査

a. 本研究所スタッフが研究代表者であるもの

重点領域研究(1)

原洋之介「地域発展の固有論理」

研究代表者: 原洋之介 研究分担者: 海田能宏, 末廣昭, 井上真, 中村尚司,
足立明, 布野修司

アジア諸地域の発展にみられる普遍理論と固有論理のからみあいを明らかにすることを目的とする。

1994年度 760万円 1995年度 800万円

関本照夫「東南アジア近代における文化の自画像の形成」

研究代表者: 関本照夫 研究分担者: 内堀基光, 田村克己, 清水展

近代の東南アジアにおいて、国民、民族、地域その他さまざまな政治的集団が「自らの文化」を意識し主張し、さらに他者の視線への反応から自己像を作ってきた歴史と現状を、インドネシア、マレーシア、フィリピン、ビルマなどの事例から検討し、近代世界における文化的政治のより深い理解を目指した。

1994年度 190万円 1995年度 220万円

濱下武志「南海をめぐる日本琉球関係史」(総括代表 岩崎宏之『沖縄の歴史情報』)

研究代表者: 濱下武志 研究分担者: 荒野泰典, 村井莊介, 高橋公明, 原口泉,
紙屋敦之, 鶴田啓, 五野井隆史, 松井洋子, 弘末雅士, 菅谷成子, 黨武彦, 浅見雅一

南海は歴史的には南シナ海を中国側から表現したものであるが、ここでは、東シナ海からインド洋までを含む海域をめぐる日本、東南アジア、西洋の歴史資料のあり方を総合的に検討することを目的としている。そしてその中で琉球史の対外的広がりを明らかにする。

1994年度 750万 1995年度 750万

宮嶋博史「地域性の形成における人口・環境要因の作用」

研究代表者: 宮嶋博史 研究分担者: 斯波義信, 柳澤悠, 斎藤修, 上田信

人口・環境要因がアジア諸地域の地域性の形成にいかに関与したのかを明らかにすることを目的としている。具体的には、人口稠密地域であった東アジア、南

アジアを対象として、その稠密な人口の存在が両地域の地域性の形成をいかに規定したのかを、人口稀薄地域であった東南アジアとの比較を通じて明らかにしようとしている。

1995年度 220万円

総合研究 (A)

猪口 孝「脱冷戦期の国際機構と日米関係」

研究代表者: (1993・94年度) 猪口 孝, (1995年度) 田中明彦 研究分担者:

猪口孝, 田中明彦, 草野厚, 古城(久具)佳子, 赤根谷達雄

冷戦後の秩序は大きく変わってきているが、中でも2大経済大国である日米の役割が大きく変化しようとしている。地球規模で政策課題に取り組まなければならないので、国際機構の関わりが注目される。国際機構の役割を理論的に分析・評価しようとした。

1994年度 200万円 1995年度 100万円

末成道男「人類学からみたベトナム社会の基礎的研究—社会構造と社会変動の理論的検討」

研究代表者: 末成道男 研究分担者: 嶋 稔, 瀬川昌久, 片山剛, 菊池秀明,

武内房司, 横山廣子, 川崎有三, 田村克己, 板垣明美, 嶋陸奥彦, 中西裕二

本研究は、日本、韓国、東南アジアとの比較を行いながら、ベトナム村落研究に関する概念の整理と仮説の構築を行った。人類学的研究の基礎造りと方向性を明らかにするため、蓄積のある歴史学との学際的協力のもとに、周辺地域に実績のある研究者を集め新しい視点のもとに研究を進展させるものであった。

1994年度 200万円 1995年度 90万円

柳澤 悠「インド・チングルプット県の生産・環境と社会: 18-20世紀の長期変動」

研究代表者: 柳澤悠 研究分担者: 辛島昇, 重松伸司, 水島司, 高橋孝信, 山

下博司, 高島淳, 粟屋利江, 田辺明生

南インドのチングルプット県については、バーナードによる詳細な村落調査が1760年代に行われていた。本研究の目的は、この調査を基点にその後の村落査定台帳などを分析して、18世紀から今日に至る期間の生産とその環境の変化や社会変化を明らかにすることにある。

1994年度 220万円 1995年度 170万円

永ノ尾信悟「ヒンドゥー儀礼の歴史性、地域性及び社会階層性に関する研究」
研究代表者: 永ノ尾信悟 研究分担者: 石井溥, 臼田雅之, 小倉泰, 関根康正,
田中雅一, 三尾稔, 森雅秀, 山下博司, 横地優子

インド国勢調査1961年の村落調査モノグラフから年中儀礼の項目をひろいあげ、分析することにより、地域性と社会階層性に関するデータを収集した。最後期ヴェーダ文献やプラーナ文献、ダルマニバンダ文献の年中儀礼の情報を集め、歴史の変遷および地域的分布の差を考察した。

1994年度120万円 1995年度80万円

一般研究 (C)

松井 健「琉球列島における宗教施設の構造と空間配置を手がかりとするエスノ・ヒストリーの研究 (第二次)」

研究代表者: 松井健

琉球列島先島地方における宗教活動は、18世紀以来琉球王府の介入のもとにあったことが歴史研究から明らかになっている。本研究は、現在の時点における宗教的な施設、とくに水にかかわる信仰対象となっている井戸と神女たちが夜ごもりの儀礼を行う小屋の構造とそれらの空間的な配置をてがかりに、琉球列島南部地方の宗教儀礼のなかでも、中心的な重要性をもっている井戸と夜ごもりの儀礼が現在のようなかたちをとるようになった歴史的過程と時期を明らかにしようと試みるものであった。

1994年度60万円

試験研究 (B)

田中明彦「政治テキストの内容分析システムの構築」

研究代表者: 田中明彦 研究分担者: 原田至郎, 野中尚人, 服部正太

大量の政治関連テキストについて、概念の出現頻度や複数概念の同時出現頻度の計測、テキストの構造の図示化など、その内容をさまざまな観点から分析するコンピュータ・システムを開発することを目指して研究を進めている。

1995年度440万円

国際学術研究

松井 健「インド亜大陸における宗教・民族紛争の生成と回避のメカニズムの人類学的研究（第一・二次）」

研究代表者: 松井健 研究分担者: 永ノ尾信悟, 関根康正, 三尾稔

インド亜大陸の多くの民族, 宗教, 宗派, カースト等の錯綜している社会状況のもとで, 平和に共存していた集団が, どのような契機をもって対立したり闘争したりするのかを, 実証的に明らかにし, そのメカニズムを分析することを目的としている。代表者がイスラームの優越するパキスタンで, ほかのメンバーが北西, 北, 南インドのそれぞれ異なる条件の調査地で研究を進め, 結果を対比, 統合する。

1994年度 810万円 1995年度 810万円

末成道男「周辺からみた中国の変動過程に関する人類学的研究」

研究代表者: 末成道男 研究分担者: 王崧興, 田村克己, 三尾裕子, 清水純

蒋炳釧, 川崎有三, 瀬川昌久, 馬建釧, 伊藤亜人, 横山廣子, Ngo Duc Think
中国文明は, 古来周辺諸民族から様々な文化要素を吸収しながら, 自らの理想型を形成し, 周辺を巻き込み拡大してゆくメカニズムをもっている。中国および周辺地域で起こっている最近の経済成長や社会変動が, これら文化社会に対しどのような影響を与えているかを観察し, 中華文明の本質の動的な究明を目ざすものである。

1994年度 810万円 1995年度 870万円

濱下武志「近代東アジアの経済発展と華僑ネットワーク」

研究代表者: 濱下武志 研究分担者: 古田和子, 小瀬一, 笹谷直人, 阿部武司, 杉原薫, Ian Brown, Raj Brown, Paul Kratoska, 林満紅, 蔡志祥

香港とシンガポールを中心として華僑の移民・投資のネットワークを個別企業のレベルにおいて, また全体的な流れとその歴史的特徴において明らかにした。

1994年度 660万 1995年度 420万

蜂屋邦夫「中国文化における道教の位置と現状についての総合的調査」

研究代表者: 蜂屋邦夫 研究分担者: 高橋忠彦, 原田二郎, 前田繁樹, 横手裕, 業露華

道観調査出張期間は 1994年9月11日より10月14日まで, 調査担当者は蜂屋邦夫および業露華, 調査地点は山西(太原・洪洞など)・山東(泰山・泰安)・江

西（上饒）。他のメンバーは 1992・93 年度に実施した調査の資料をまとめる作業を補助した。また同年度に、調査研究成果をまとめて『中国の道教』として刊行した。

1994 年度 450 万円

松谷敏雄「シリア先史遺跡調査」

研究代表者: 松谷敏雄 研究分担者: 古山学, 西秋良宏, 黒沢浩, 小泉龍人, 小口高, Marie Le Mière

シリアのユーフラテス川に面した遺跡テル・コサック・シャマリにおいて発掘調査を行った。1994 年には幅 2 m のトレンチを 4 本設け、遺跡の堆積状況の把握に重点を置いた。1995 年には前年の知見にもとづき発掘区を拡張し、居住址の様相の解明に力を注いだ。1996 年の調査ではこの遺跡の全容を明らかにしたい。

1994 年度 680 万円 1995 年度 670 万円

研究成果公開促進費

岡本サエ「現代中国書データベース」

研究代表者: 岡本サエ 研究分担者: 丘山新, 黨武彦

東洋文化研究所が所蔵する中国現代書は 4 万点を越え、且つ年間数千冊入庫するが、冊子目録はなく、しかも国内で依拠すべき公開データベースは存在しない。本研究は中国書データベースの作成と共に 1996 年度に目録（電字本）を作成し、アジア研究諸機関に典拠ファイルを提供する。

1994 年度 485 万円 1995 年 770 万円

田中明彦「日本議会演説データベース」

研究代表者: 田中明彦 研究分担者: 渡邊昭夫, 山影進, 北岡伸一, 野中尚人

帝国議会開設から戦後の国会の全期間において総理大臣、外務大臣、大蔵大臣ならびに経済企画庁長官が行った議会での演説に関して、その全文とともに、演説者の氏名、演説の種別、演説の年月日、内閣の名称、国会の回次と場所（院別）等を収録し、漢字かなまじりの日本語でデータベース化し、インターネットで公開する。

1995 年度 288 万円

b. 本研究所スタッフが研究分担者として参加しているもの

「地域発展の固有論理」(1994・95年度, 研究代表者: 末廣昭)

参加者: 原洋之介

「政治テキストの内容分析システム構築」(1995~97年度, 研究代表者: 田中明彦)

参加者: 原田至郎

「東南アジア島嶼部における国民文化と地方文化の相関的動態の文化人類学的研究」(1994~96年度, 研究代表者: 山下晋司) 参加者: 関本照夫

「近代における世界志向システムと地域社会の相互的ダイナミクス」(1995年度, 研究代表者: 船曳建夫) 参加者: 関本照夫

「東南アジア地域体系の形成と周辺地域への関与」(1994・95年度, 研究代表者: 山影進) 参加者: 濱下武志

「海域世界の地域間比較」(1994・95年度, 研究代表者: 高谷好一, 古川久雄)

参加者: 濱下武志

「資料収集とデータベース」(1994・95年度, 研究代表者: 岡本サエ)

参加者: 丘山新

「転形期における中国知識人」(1994~96年度, 研究代表者: 小谷一郎)

参加者: 丸尾常喜

「『中国絵画総合図録』増補改訂版制作のための日本国内の中国絵画調査」(1994年度, 研究代表者: 戸田禎佑) 参加者: 小川裕充

「地域性の形成論理」(1994~96年度, 研究代表者: 坪内良博)

参加者: 加納啓良

「インド文学の自然観の問題について」(1994・95年度, 研究代表者: 今西順吉)

参加者: 上村勝彦

「インド亜大陸における民族・宗教紛争の生成と回避のメカニズムの人類学的研究」(1994・95年度, 研究代表者: 松井健) 参加者: 永ノ尾信悟

「地中海世界沿岸都市におけるマイノリティー集団のネットワーク」(1995年度, 研究代表者: 竹内啓一) 参加者: 長澤榮治

「民族誌的現在の歴史的文脈」(1994・95年度, 研究代表者: 栗本英世)

参加者: 長澤榮治

「西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究」(1994~96年度, 研究代表者: 松本健) 参加者: 松谷敏雄

「世界の諸宗教文化における聖典と聖典解釈に関する総合的研究」(1995年度, 研究代表者: 金井新二) 参加者: 鎌田 繁

4. その他の経費による研究・調査

サントリー文化財団

猪口 孝「冷戦後における日米関係と国際組織」

研究代表者: 猪口孝 研究分担者: 草野厚, 田中明彦, 土山実男, 栗原奨, Peter Gourevich, Peter Cowhey, Yuen Fong Khong, Courtney Purrington

世紀末の大きな地殻変動の中で、今まで前提としてきたものが再検討され、世界規模で構造変化が起こりつつある。このような時、国際組織の果たすべき役割のルール形成や制度構築の過程の中で、日米両国の果たすべき役割は何かを、日米とアジアの学者が議論してよりよい方向性を探った。

1994・95年度 180万円

日本生命財団

松井 健「『自然』観の通文化的研究: 自然との共生の新しいイメージの模索」

研究代表者: 松井健 研究分担者: 永ノ尾信悟, 篠原徹, 菅豊, 栗田和明, 掛谷誠, 太田至, 菅原和孝, 松田清, 宮岡伯人, 武田淳, 山本紀夫, 松原正毅, 須藤健一

世界各地にそれぞれに固有の自然の見方があり、自然とのかかわり方がある。しかし、それらは深く文化のなかに埋め込まれているため、その土地で十分に調査を行った研究者でなければ、個別の「自然」観を解明することはむづかしい。このため、それぞれの地方の専門家の参加をえて、研究会を行い、相互に比較しつつ議論を進める。1994年度と1995年度で、5回10日間の研究会を行い、18の研究発表をもち、それぞれについて集中した討論を行った。

1994年度 200万円

順益台湾原住民博物館 林迺翁文教基金会

末成道男「台湾原住民研究」

研究代表者: 末成道男 研究分担者: 土田滋, 王崧興, 松澤員子, 姫野翠, 山路勝彦, C. Daniels, J. Eades, 笠原政治, 森口恒一, 馬淵悟, 長沢利明, 清水純, 中西裕二, 片岡樹, 野林厚志, 山田慎也, 小林岳二, 月田尚美, 野島本泰

日本における既往の台湾原住民研究を整理すると共に、現地調査を行い、研究とその公刊を通じて広い意味での現地還元をはかる。研究会方式とし、これまで研究を進めてきたコアメンバーに、若手を加え、日本統治期以来の研究資料の整理、現地調査の実施、成果の公刊を柱とする四年計画の第1・2年度として作業

を進めた。

1994・95年度2000万円

高梨学術奨励基金

末成道男「ベトナムにおける葬礼の社会人類学的研究」

研究代表者: 末成道男 研究分担者: 武内房司, Nguyen Thi Oanh, 宮沢千尋

漢文化の濃厚な影響を受けながらなお固有の文化を根強く持っているベトナムにおいて儀礼面からその特徴を追及しようとするものである。今回は、儀礼のうちでも最も重要で普遍性をもつ葬礼を取り上げ、現地において農村、都市の事例を観察すると共に、文献資料から過去からの変遷をたどり他社会との比較を行った。

1994年度50万円

三菱財団

濱下 武志「香港史資料の総合的研究」

研究代表者: 濱下武志 研究分担者: 谷垣真理子, Elizabeth Sinn, 蔡志祥

香港情報は経済情報を中心として19世紀後半から日本においても事情研究の中で蓄積されてきたが、本研究では、1) 社会情報、2) 政庁刊行物、3) 華南資料などとの関連において歴史資料を系統的に検討・収集した。

1994・95年度300万

鹿島美術財団

小川裕充「台北故宮博物院藏品調査、及び台北歴史博物館開催エルミタージュ美術館所蔵西夏美術展調査」

研究代表者: 小川裕充 研究分担者: 板倉聖哲, 伊藤大輔

1994年11月4日より11月15日まで、実質10日間にわたって、台北故宮博物院の藏品調査と、写真資料購入を行い、『中国絵画総合図録』改訂増補版刊行の参考とする所期の目的を達成した。なお、エルミタージュ美術館所蔵西夏美術展調査は、開催期日変更により、当初予定と齟齬するに至ったため中止し、故宮博物院調査に集中した。

1994年度270万円

トヨタ財団

井坂理穂「植民地期のインドにおける中間層の形成とその意識——西インドの都市中間層の社会・文化活動」

研究代表者: 井坂理穂

1995年9月末よりイギリスに滞在し、西インドのアムダーヴァード市に関する植民地当局の報告書、及び19世紀後半に出された各種出版物の収集・分析を行った。

1995年度 160万円

鹿島財団

羽田正「イラン都市における宗教建築の構造と機能の研究」

研究代表者: 羽田正

1996年3月から英国のケンブリッジ大学に Visiting Scholar として約1年間滞在し、主としてイスラム世界の宗教建築とその歴史に関する文献調査を行なうとともに、英国及びヨーロッパ諸国のイスラム世界研究についての知見を広めている。また、あわせて現地調査にも従事する予定である。

1995年度 400万円

高梨学術奨励基金

末成道男「ベトナムにおける教育の社会人類学的研究」

研究代表者: 末成道男 研究分担者: 武内房司, 板垣明美, 宮沢千尋

現在急速に経済成長をとげ現代化への途上にあるベトナム社会において、教育がどのような問題を抱えているかを明らかにしようとするものである。ここでは、とくに人類学に関係の深い分野に限定し日常生活に現れた教育の現場での観察から問題点をとらえ分析する。

1995年度 40万円

稲盛財団

羽田 正「イスラム世界における人材養成施設マドラサの研究」

研究代表者: 羽田正

マドラサ関係の文献収集と調査のためにパリに赴き(1995年9月~10月)、現地研究者と討議を行うとともに、国立図書館、アラブ世界研究所、パリ第3大学などで文献研究に従事した。

1995年度 80万円

国際交流基金

後藤明「国際シンポジウム: 21世紀のアジア-アジア研究の新たな枠組の構築」

代表者: 後藤明

1995年9月12日より9月13日にかけて外部評価委員17名と東洋文化研究所スタッフによる国際シンポジウムが開催されたが、当基金助成金は、招待された外部評価委員の国際航空運賃、滞在費等に使用した。

1995年度 300万

学術振興会海外特別研究員

山中由里子「中東イスラム世界における『アレクサンドロス物語』の伝播と変容」

パリにおける中東関係の研究所および図書館（パリ国立図書館東洋写本室、ソルボンヌ大学、イラン学研究所、アラブ世界研究所、東洋言語学校など）において資料収集を行うと同時に研究者との交流を深める。

1994. 10. 1～1996. 9. 30 滞在費 8,969,472円、調査研究費年間支給額 60万円

トヨタ財団

「インドネシア伝統工芸に関する日本・インドネシアの共同研究——ジャワ更紗を中心とする歴史・意匠・技術の総合調査」

研究代表者: 小笠原小枝 研究分担者: 関本照夫

1994・95年度

5. 私費による海外学術調査

青木 敦

1995、96と春にそれぞれ2週間ほど、上海付近および台湾で農村調査を行った。主に経済発展と家計の変化の関連などについてであり、東大文学部桜井由躬雄氏らと共同して村落の悉皆調査を行った。

吉開将人

1995.8～1995.9、北京・南寧。北京では、北京図書館にて民国時代の金石著録や雑誌など文献の収集を行った。南寧では、広西博物館にて銅鼓の調査を行うとともに、その総合調査のための共同研究計画について協議した。

笠井直美

中国雲南省儺戲調査、香港中元節地方劇・儀礼調査。1994年7・8月に、古い

演劇の様相を残すものとして演劇史上注目されている仮面劇「儺戯」の一種、雲南省江県の「関索戯」及びそれに付随する儀礼を調査した。この劇は又、詩讚系語り物・小説『三国演義』との関連でも注目される。また、中元節に伴う演劇として香港の柴湾海陸豊劇及び儀礼、東頭邨潮劇、石籬潮劇、葵涌邨潮劇の調査を行った。

小川裕充

清朝内府蔵品を継承する台北故宮博物院において 1995 年秋に開催された創立 70 周年記念展覧会を機会に、同院所蔵作品を 1 か月に亘って調査した。宋元絵画に重点をおいたこの調査は、アメリカにおける台北故宮博物院名品展出品の明清絵画を中心として、1995 年度特別事業費により行った海外現地研究に連動するものである。

井坂理穂

1995 年 7 月より 9 月初めまでインドにて資料調査を行った。目的は、19 世紀に西インド・グジャラートで出された各種出版物を収集することであった。

F 国際学術交流

1. 交流協定

タイ国・カセサート大学経済経営学部との学術交流協定

1995年3月に、当研究所はタイ国カセサート大学経済経営学部との間で、学術交流協定を結んだ。過去20年程度、当研究所の東南アジア経済研究者はタイ国で経済・農村調査研究を実施するに際してカセサート大学に協力をしてもらってきた。また、カセサート大学の研究者が日本等東アジアの研究をするに際して当研究所は彼等を外国人研究員として受け入れてきた。こういう経験を前提として、学術交流協定と結んだ。

当初は5カ年を期限として、当研究所のタイ研究とカセサート大学の日本研究とを促進させる目的で、研究者の相互交流を中心として協定を運営していく。資金的裏づけが出来れば、この相互協定に加えて、国際シンポジウム等を行う予定である。さらに、最初の5カ年の成果をふまえて、交流協定の更新を行うことも計画している。

香港大学アジア研究センターとの学術交流協定

本研究所が交流拠点の役割を果し、東京大学の海外学術研究拠点を強化する一環として、1995年10月本研究所は香港大学アジア研究センターとの間に交流協定を結び、共同研究を開始した。協定の内容は、(1)共同研究の推進、(2)研究者の交流、(3)資料・研究情報の交換の三項からなる。

この交流協定は、本研究所の長期国際共同研究の一つである「中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究」と密接に関連しており、現在進行中のプロジェクトには以下のものがある。

(1) アジア研究ネットワークの形成、(2) アジア研究情報センター設立プロジェクト、(3) 珠江デルタ、新界、香港の社会変化の比較研究、(4) 中国の経済発展と企業家、(5) 香港社会史、(6) 香港の選挙制度と政治意識の変化、などがあり、それぞれに、資料調査、現地研究、国際ワークショップなどが進められている。

中国・復旦大学との学術交流協定

東京大学と復旦大学との間における学術交流協定は、1991年10月に結ばれた。この協定の運用は、東京大学では、これまで理学部が担当部局であったが、1996年に更新期限となり、その後東洋文化研究所が担当することとなった。交流の内容は両校間における(1)教官、研究者、院生、学生の交流、(2)共同研究の計画と実施、(3)講義とセミナーの実施、(4)学術情報及び学術刊行物の交換、などである。

東洋文化研究所は、すでに、個々の共同プロジェクトで復旦大学と研究交流を進めてきたが、今後、大学間交流を担当するに際し、より多角的・総合的な交流を進めていきたい。

2. 国際シンポジウム「21世紀のアジア」

1995年9月12～13日の2日間、本研究所が主催する国際シンポジウム“Asia in the 21st Century: Toward a New Framework of Asian Studies”が、東京大学山上会館で開催された。この会議は、欧米を中心とする世界秩序が単に政治経済の面だけではなく、学術的アジア研究の分野でも過去のものになりつつある現状の中で、21世紀における新しいアジア研究の枠組と研究交流の体制を議論するために開かれた。韓国、中国、香港、台湾、マレーシア、インド、イラン、レバノン、英国、米国など国外9名の招待講演者をふくめ16名の講演が、4つのセッションに分かれて行われ、国内外約150名が参加した。会議の実施にあたっては、文部省、国際交流基金、鹿島美術財団、東京大学総長から財政面その他の支援を受けた。

3. 長期外国出張 (1994・95年度)

研究所スタッフの外国出張の件数は、1994年度 67件、1995年度 59件であった。そのうち3ヵ月をこす長期の外国出張は次の通りである。

氏名	出張先	期間	目的
黨 武彦	中国	94. 6. 1 ～95. 3. 31	16, 18世紀における中国北部地域社会の歴史的研究 中国人民大学清史研究所において調査研究(在研)
田中 明彦	英国・イタリア・ 米国・ギリシャ	94. 8. 25 ～95. 8. 16	「牛場フェロー」として近代世界システムをめぐる思想・技術の連関についての研究及び国際政治に関する会議への参加のため Senior Associate Membership of St. Antony's College, Oxford (牛場記念財団, SSRC, ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス 経済実績センター, ギリシャ・ヨーロッパ外交政策研究財団)
山中由里子	フランス, 英国, ドイツ, イタリア他	94. 10. 1 ～96. 9. 30	中東イスラム世界における「アレクサンドロス物語」の研究 Centre d'Etudes Islamiques et Orientales d'Histoire Comparée, Sorbonne 学振(海外特別研究員)
笠井 直美	中国, フランス, 英国, イタリア	94. 10. 1 ～95. 7. 31	研究調査 北京大学(在研)
松井 健	バキスタン, インド	94. 10. 12 ～95. 2. 13	科研費による野外調査
井坂 理穂	英国	95. 9. 19 ～97. 9. 19	西インド近代史の研究 SOAS; Faculty of History, University of Cambridge; India Office Library において調査研究
松井 健	UAE, バーハレン, オマーン, バキスタン, インド	95. 9. 22 ～96. 2. 5	科研費による学術調査(第二次)(インド亜大陸における民族・宗教紛争の生成と回避のメカニズムの人類学的研究)
羽田 正	英国	96. 3. 27 ～97. 3. 7	イスラム宗教建築の研究 Faculty of Oriental Studies, University of Cambridge

氏名	所属・身分	期間	研究課題
曹 瑋	陝西省考古研究所・ 助理研究員	1994. 4. 1 ～95. 3. 31	西周青銅器と銘文について
金正賢	ハンベク研究財団・ 研究員	1994. 4. 1 ～95. 3. 31	1930～40年代の大東亜共栄圏をめぐる日本、中国、韓国の認識差について比較研究
Gregory Paul Guelcher	イリノイ大学歴史系 博士課程・院生	1994. 4. 1 ～95. 5. 31	満州への日本農業移民 1931～1945
馬 曉 宏	社会科学院宗教研究 所・研究員	1994. 5. 16 ～94. 6. 4	道教成立以前の中国宗教思想についての日本における研究
業 露 華	上海社会科学院宗教 研究所・副研究員	1994. 5. 17 ～94. 7. 15	儒仏道三教の衝突と融合
窪田 明	ウインザー大学（カ ナダ）・準教授	1994. 7. 1 ～95. 6. 30	国際政治経済
陳 捷	北京大学中国語言文 学系・講師	1994. 7. 1 ～95. 3. 31	日本における漢籍の調査と研究
Srinivasa Chakravarthy Dasari	ジャワハルラル・ネ ルー大学東アジア研 究センター・院生	1994. 8. 11 ～96. 10. 10	世界における日本の役割
Katherine G. Burns	M. I. T. 政治学部博 士課程・院生	1994. 8. 12 ～95. 6. 30	東北アジア地域総合研究—函館港の事例
Tobie Meyer	スタンフォード大学 歴史学部博士課程・ 院生	1994. 8. 15 ～95. 3. 30	18世紀揚州の旅行文化
Benedicte Callan	カリフォルニア大学 政治学部博士課程・ 院生	1994. 9. 1 ～95. 2. 28	生化学技術における技術革新と戦略的同盟のシステム
玉本 偉	アメリカン大学国際 関係学部・助教授、 ハーバード大学国際 関係研究所・上級研 究員	1994. 9. 1 ～95. 8. 31	トルコと日本を中心に、アジア諸国の近代国際関係思想の比較研究
Birya Gaja- meragedara	ペラデニヤ大学芸術 学部（スリランカ）・ 準教授	1994. 9. 1 ～95. 2. 28	世界における日本の役割
Olga Innoken- tiyevna Nikolaeva	ロシア科学アカデミー 世界経済国際関係研 究所・研究員	1994. 10. 11 ～95. 3. 10	変革期における日本の政治システム
河 英 善	ソウル大学教授	1994. 12. 1 ～95. 3. 31	東北アジアの軍備管理
Momtaz Uddin Ahmed	ダッカ大学経済学部・ 教授	1995. 1. 1 ～96. 1. 15	労使関係と工業生産性—日本の近代の経験とそのバングラデシュへの適用可能性
河野さつき	ピッツバーグ大学博 士課程・院生	1995. 5. 31 ～96. 5. 30	儀礼参与の文化人類学的分析—性差・家族・パワーとの関連
徐 啓 新	中国国务院発展研究 センター、アジア・ アフリカ発展研究所・ 副教授	1995. 1. 1 ～95. 6. 30	アジア太平洋経済協力関係における日本の地位と役割、戦後日本の経済発展と社会的背景
John W. Traphagan	ピッツバーグ大学博 士課程・院生	1995. 1. 1 ～96. 8. 31	日本家庭における老人に関する意思決定
A. Z. M. Iftikhar- Ul-Awwal	ダッカ大学歴史学部・ 教授	1995. 1. 29 ～95. 8. 31	バングラデシュ・日本間の貿易構造：1972—1992

4. 外国人研究者等（1994・95年度受入れ）

氏名	所属・身分	期間	研究課題
Prasert Chittiwatanapong 張 東 東	タマサート大学政治学 学部・教授	1995. 2. 1 ～95. 3. 31	日本政府の開発援助一政策決定過程
王 凌	オーストラリア国立 大学博士課程・院生	1995. 3. 1 ～95. 5. 30	最近20年間の中日関係（とりわけ政治経済）
呉 俊	第一歴史档案馆・助 理研究員	1995. 4. 1 ～96. 3. 31	東洋文化研究所蔵档案資料の調査研究
朴 宣 冷	華東師範大学中文系・ 副教授, 東北大学言語 文化部・客員研究員	1995. 4. 1 ～96. 3. 31	胡適の思想・学術研究
朱 蔭 貴	南京大学歴史系・院 生	1995. 4. 15 ～95. 6. 15	中国東北抗日義勇軍の研究
呉 密 察	社会科学院経済研究 所・副研究員	1995. 6. 1 ～97. 5. 31	証券市場を中心とした日中金融市場の歴史比較
裴 紀 燦	台湾大学歴史系・副 教授	1995. 7. 20 ～96. 2. 28, 1996. 6. 15 ～96. 9. 14	日本近代の殖民主義と台湾
湛 如	国会外務統一政策担 当秘書官, 韓国社会 科学研究所・非常任 研究員	1995. 8. 1 ～96. 7. 31	日本, 中国, ロシアの対韓半島政策と南北韓統一問題
戴 一 峰	南仏学院・助教授	1995. 8. 1 ～96. 7. 31	敦煌仏教礼儀文書の研究
劉 靖 之	厦門大学歴史系・副 教授	1995. 9. 10 ～96. 3. 10	近代環中国海交易圏: 中日商人比較研究
Adapa Satyanarayana R. D. McChesney 李 卓 然	香港大学アジア研究 センター・研究員	1995. 9. 13 ～95. 9. 20	西洋音楽受容に関する日中比較
Nguyen Thi Oanh Pham Kim Hung 崔 世 広	オスマニア大学歴史 学部(インド)・助教授	1995. 10. 1 ～96. 9. 30	南インドにおける土地・カーストと支配
姜 進	ニューヨーク大学準 教授	1995. 10. 23 ～95. 12. 21	東方イスラム世界における都市と宗教施設
李 培 徳	シンガポール大学中 国研究学科・高級講師	1995. 11. 1 ～95. 12. 31	山西標号資料編集
Aditya Mukherjee Mridula Mukherjee 都 珣 淳	ベトナム社会科学院 漢喃研究所・副研究員	1995. 11. 13 ～95. 12. 13	越・中・日民間文化比較研究
	ハノイ大学・教授	1995. 11. 13 ～95. 12. 13	越中関係史資料収集
	中国社会科学院日本 研究所・副研究員	1996. 1. 4 ～96. 2. 3	現代日本の社会思潮と日中関係
	スタンフォード大学 歴史系・院生	1996. 1. 15 ～96. 8. 15	中国近代化における粵劇女優の登場
	香港大学アジア研究 センター・講師	1996. 2. 1 ～96. 4. 30	近100年の香港・日本・中国関係史とアジア・パシフィック
	ジャワハルラル・ネルー 大学歴史学研究科・ 助教授	1996. 3. 21 ～96. 6. 18	第2次大戦期以降の日本の経済発展
	ジャワハルラル・ネルー 大学歴史学研究科・ 助教授	1996. 3. 21 ～96. 6. 18	第2次大戦期以降の日本の経済発展
	漢陽大学校師範大学 ・教授	1996. 3. 25 ～97. 3. 24	韓国道教の研究